武装

学園占拠都市反乱から工場占拠ゼネストへ
10－11月闘争の任務

工場占拠ゼネスト・二重権力・武装蜂起 …… 8

擬制の中央権力闘争か工場占拠への突破口か、一左翼諸派の階級的地位 …… 22

10・21新宿都市人民戦争から11月佐藤訪米粉砕全都交通線分断都市反乱の爆発へ！ …… 33

青年共産同盟

2

序

安保闘争の焦点（一〇月―一一月）を前にして、日本の社会全体が大きく転回しはじめている。

帝国主義支配階級の行動が開始された。愛知外務大臣は、ソ連―欧州―アメリカと外遊し、安保をはじめとする対外政策の打診を行なつている。そして、アメリカ滞在中には一一月のニクソン―佐藤会談への最終的準備工作が予定されているのだ。

また、彼ら支配階級は、警察権力の全てを動員し、大学立法を背景とした学園バリケードに対する破壊攻撃を連続的に行なつている。これもまた、一〇月―一一月に向けての先制攻撃であり、反乱戦線鎮圧の策動以外のなにものでもない。

こうした敵階級の動きに対して、味方の戦線はどうか。

明らかな事実は、全ての革命的労働者、先進的学生、そして闘う高校生や諸グループが「何か行動を起さなければならない」と感じていることである。

だが、どう起せばいいのか？

社会党や日共は、社共統一戦線を再び提唱してきている。だが、彼らの「統一戦線」の実体は、佐藤訪米後の一二月総選挙をめあてにした選挙カンパニア運動でしかない。

セクト各派の諸君はどうか。

彼らは確かに「一一月決戦」を叫んでいる。だが、それはせいぜいより大量なデモと若干のエスカレートした武器とによつて、官庁街や現地に向けての一発的な行動がとられようとしているだけだ。

それで果して四・二八闘争の壁が破れるのか？　強化されている敵の弾圧体制を粉砕できるのか？　それとも大量に逮捕される闘争をやれば、それで良し、とするのか？

ところで、全共闘はどうか。たしかに全共闘運動は、学園占拠闘争を基礎にした新たな闘争組織としての運動を切りひらいた。

だが、今の全国全共闘は、結局、セクト諸派連合の世を忍ぶ仮の姿にすぎないものになつてしまつている。

全国の革命的労働者学生諸君！

昨年の一〇・二一闘争を今一度想起してみよう。一〇・二一新宿闘争では、一万二〇〇〇の武装機動隊が一瞬にして無力化したのだつた。

われわれは全ての同志諸君に、単なる街頭デモではなく、密集した大衆と戦闘組織部隊による都市反乱闘争を提起する。しかもそれによつて敵権力を麻痺させその無力性を暴露するだけではなく、そうした都市反乱闘争を、真に権力を打倒するための「労働者階級の権力」を生み出す原点＝工場占拠ゼネストへの突破口たらしめる必要があるだろう。

今、われわれに鋭く問われているのは、強力な装備と大量

の部隊による敵権力の弾圧体制を打ち破る「戦術」と、それを革命的権力奪取の闘いへと結びつける目的意識性とである。このことをわれわれの共通認識の出発点として確認した上で、自らの任務をさらに明確にしていこう。

× × ×

日本帝国主義の安保攻撃は、次の三つの要素を契機に進行している。

第一は、言うまでもなく、日本国内において、学生と先進的労働者の反乱闘争が拡大してきているという事実。

第二は、アジアにおける政治的軍事的支配体制の再編成に直面していること。

第三は、最近の欧州を中心とした帝国主義の政治的経済的世界危機の深化という事態。

日本における階級斗争は、六七年〜六八年にかけて、一連のベトナム反戦・基地撤去の街頭実力行動と、それを突破口にした学生の学園占拠バリケード闘争として闘いとられた。まずブルジョア支配秩序の弱い環であり、諸矛盾の累積した学園において、バリケード占拠の大衆反乱闘争が登場したのである。

今年に入り、労働者階級本隊の職場実力闘争が次第に顕在化しはじめてきた。それは、基幹労働者の組合官僚に対する下からの造反と「山ネコスト」型の闘争の開始として、そして、中小企業労働者の職場突入ストや部分的な職場占拠闘争の貫徹として特徴づけられる。

日本帝国主義ブルジョアジーは、こうした反乱戦線の拡大に対して、機動隊の大巾な増強、自衛隊の公然たる治安訓練の強化をはかり、さしあたつて大学立法をテコとする徹底したバリケード攻撃とデモに対する高圧的な規制とを先制的に加えてきている。

他方、日本帝国主義は、その対アジア政策においても転換点に直面している。

ベトナムを筆頭とするアジアの解放闘争は、従来の民族ブルジョアジーのヘゲモニーにおける民族独立運動とそれを背景にした米ソの国際的取引体制を一歩ぶち破り、解放革命戦争としての発展を遂げた。そして、アメリカ帝国主義のSEATOを軸とした反共軍事体制は再編成を迫られているのだ

従来、日本帝国主義のアジア政策は、アメリカ、カナダ、オーストラリアを含めたアジア太平洋地域の「共同開発」に重点がおかれ、その内実は、アメリカ等の資本力をテコに、日本の技術援助、プラント輸出、市場開拓を行なおうというものであつた。

だが、ベトナム戦争の困難、イギリスのマレーシア撤兵などから破綻に瀕したSEATO体制に代わり、新たなアジア反革命体制を構築するために、日本帝国主義は、日米安保を軸とする再編成に踏み出した。現在行なわれている沖縄問題の焦点もあげて、日米両帝国主義の新しいアジア反革命体制

核軍事体制への路線の確立にあるのだ。そして、この路線の次の課題は、日本帝国主義の明確な核体制への参加・海外派兵・そして徴兵制度の施行にあるだろう。

一方、最近の欧州における政治的経済的危機の深化はますます急速に進んでいる。

まず、帝国主義の経済的世界体制は、六七年一一月のポンド切下げ以来、この一年半の間にすでに五回の通貨危機をもたらし、フラン切下げから今秋にかけての六度目が現在進行中である。このような国際通価体制の破綻と国際投機を媒介にした超高金利政策の実施は、各国ブルジョアジーをして為替レートの泥沼的引下げ戦か、あるいは為替管理の全面化かを迫り、世界経済の分断化を賭した死活の競争戦を強いている。

そして、彼らブルジョアジーとその政府は大規模な合理化賃金抑制と強収奪、政治支配の強化の攻撃を労働者人民に加え、深刻な政治危機を作り出している。その最も端的な爆発が昨年のフランス五月革命であつたし、現在もなお、フランス、西ドイツ、イタリアなど欧州帝国主義諸国内では、大規模なストライキ、山ネコスト、工場占拠闘争が頻発している

こうした政治経済危機の深化は、「イザナギ景気」を謳歌してきた日本ブルジョアジーにもようやく危機感を与え、金利の引上げから本格的な財政収奪、公共部門の合理化等の攻撃が開始されようとしている。

以上見てきたように、日本帝国主義は、国内反乱戦線の拡大とアジア反革命軍事体制への加担、経済的政治的世界危機の深化とにつき動かされて、安保攻撃を強化してきている。佐藤自民党政府は、先にも確認したように、当面機動隊による学園支配をもつて先制攻撃をかけつつ、沖縄の名目上の「復帰」を背景にした十二月総選挙で「国民的支持」を集約することをねらつているだろう。と同時に、「十二月選挙」の構想は、社会党などの野党と自民党内の反主流派に対するどうかつと牽制とを意味し、これらの抵抗と反発を前国会にひき続いて一層無力化させ、一気に七〇年体制を作り出そうとしているのである。

だが、こうした敵の安保攻撃に対して、労働者階級人民の反乱闘争も確実に拡大してきている。

政府ブルジョアジーによる大学立法の強行は全国の学園に新たなバリケード戦線を作り出させた。そして、最近では、高校生の学園斗争も急速に波及しはじめてきた。

今年の六・一五斗争や九・五全国全共斗結成に結集した万余の力の中にもそれははつきり示されているだろう。

また先にものべたように、労働者階級本隊の戦線も前進を開始してきている。

基幹労働者の組合官僚に対する下からの反乱の公然化、未組織労働者の職場占拠斗争の登場ーこれらは日本における労働運動が歴史的転換を遂げているのだということを示している。

しかも、われわれは、こうした転換がもつている世界史的な意義について知らなければならないだろう。

最近、新聞は連日のようにヨーロッパにおける「労働争議」の激発を訴えている。西ドイツの炭鉱・鉄鋼労働者の山ネコスト、イタリア金属労働者の連続ストライキと武装警官隊との衝突、フランス鉄道労働者のストライキなど全欧州を縦断して闘いがきり結ばれているのである。

とくに西ドイツの場合、組合に君臨してきたドイツ社会民主党が連立政府に参加し与党化して以来、下部労働者の不満が著しく高まり、社民官僚との斗争を通してゲリラ的ストを打つという特徴をもつている。この点は昨年のフランスの五月革命においても大規模に示された。フランス五月の最も鋭い特徴は、初期の段階において、行動委員会に結集した先進的労働者のピケによる工場の部分占拠によつてその突破口が切りひらかれたことであつた。そのことが、従来のCGT幹部の行うゼネストとは全く異なる性格、すなわち経済的圧力ストではなく、ドゴール執行権力と正面対決する反乱の性格を与えたのである。

こうして、国際競争戦の激化に伴う帝国主義ブルジョアジーの国内労働者階級人民に対する攻撃は、いわゆる組合主義労働運動の基盤を奪い去り、それに対する労働者の抵抗と反撃は、組合官僚との激烈な斗いと工場占拠のゼネストという闘争形態を登場させている。

闘争の圧殺者＝出版労協幹部の御用大会を粉砕した出版青年労働者の斗い、全逓下部労働者の宝樹路線への反逆、東京大阪の中小未組織労働者の職場占拠ーこれらの諸闘争は、日本の労働者階級もまた、ヨーロッパ労働者階級とともに、新たな歴史的飛躍を遂げつつあることを物語つている。そして今秋、国鉄労働者は、機関助士廃止の攻撃に直面し、再び一〇万名の首切りをかけて、国労・動労幹部の「マッチ・ポンプ」式ボス交路線との対決を迫られているのである。

学園占拠ストライキから、労働者階級の職場・工場占拠の端緒的な開始、高校生の戦線への参加等々、日本の労働者階級人民の反乱斗争はますます広範な分野に燃え拡がつている

そして、革命的な労働者・学生・先進的な活動家は、総反乱の合図を〝今や遅し〟、と待ち構えている!!

ところで、わが「公認」の指導部、社会党・総評民同や日本共産党は、この日本階級斗争の昂まりをどこに導びこうとしているのだろうか。

社会党は都京都議選でまたまた手痛い打撃を受けた。切り札であるはずの「成田ー江田」新体制にもかかわらず最近の社会党は、することなすこと全て失敗、といつた有様である「青年のエネルギーを結集しよう」と訴えてこびを売つてみても、所詮は戦後体制の維持派に過ぎない党が反乱斗争に迎えられよう訳もない。逆に右派からは選挙対策上、沖縄返還交渉に向う佐藤訪米に「阻止」を唱えるのはまずい、として突き上げられ、かんじんの一一月に対しても実にあいまいな態度をとらざるを得ない状態だ。

また、社会党の実体的基盤である総評民同も、資本の攻撃と下部労働者の反乱の両者から手痛い打撃を受けている。彼らは、「非常識」で「無軌道」な青年労働者の斗いを自らの座を揺がす行動とみなし、反戦青年委員会の解体を決定しただが、青年労働者は、もうポーズだけの「闘争」はたくさんだと思つており、ますます組合官僚への不信をつのらせている。

こうした事態は、戦後十数年に及ぶ組合主義労働運動とそれを基礎とする「組合政治」の破産を意味しているのだ。

他方、日本共産党はどうか。

彼らは、確かに強固な地区組織によつて、先の都議選でも、社会党票の「落穂」を拾うことにある程度成功した。だが、彼ら日共も、反乱斗争の登場に脅威を感じている。とりわけ学園占拠バリケード斗争の拡大は、日共の影響下にある教授会の地位を崩壊させ、日共系全学連を解体させるものであつて、政府自民党に劣らぬほどこれを敵視している。それゆえ各地で右翼や体育会と連合し、全共斗とバリケードに対し実力で攻撃をかけているのだ。しかし彼らの大衆結集力は、眼にみえて後退してきている。

以上、社会党総評や日本共産党は、反乱戦線の前進によつて自らがその「被害者」であると感じている。当面、彼らは自民党の一一月佐藤訪米↓一二月総選挙の攻撃に対して、一〇・二一の統一実行委員会を中心にした社共共斗を形成し、総選挙のためのカンパニアへ労働者学生を動員しようとしているのだ。これが、敵の執行権力の強化による安保攻撃に対して全く無力であるばかりでなく、労働者階級人民の真の闘争力に対する敵対物にほかならないことは、もはや火を見るよりも明かであろう。

それでは、これに対して、左翼諸派の戦線は、どのように斗いを導びこうとしているのか。

すでに確認したように、今日、反乱斗争の指導部に要求されているのは、戦略的任務への目的意識性に貫かれた、敵の権力を打砕くための戦術である。とくにそれは、バリケード闘争と街頭闘争において切実に迫られている。

ところが左翼諸派指導部は、（学園バリケード闘争を「教育斗争」として「理念斗争」にすりかえてしまう部分は論外

としても）、せいぜい、単純籠城方針と単発型の官庁デモや現地デモを提起しているにすぎない。それを、「徹底抗戦」や「決戦」というように、いささか精神主義的に強調するに留まつている。あるいはまた、安保斗争を「学園斗争」から切り離して上位におき、全共斗を街頭結集への手段にしてより多くのデモを考えているにすぎないのだ。

現在問われている一〇月―一一月の焦点における行動は果してこのような街頭カンパニアデモにある程度のゲバルト部隊を加え、若干の武器をエスカレートするだけで十分だろうか。それで、警備の増強を重ね、包囲体制を固める敵権力を真に解体させることが可能であろうか。昨年の一一・七闘争以降、四・二八闘争を経てきた全ての闘いは、その単なる延長線の上においては不可能であることを示している。

われわれは、こうした左翼セクト諸派の〝擬制の中央権力斗争〟に対して、都市反乱闘争を提起している。それは、都市の拠点における密集した労働者人民の大衆的武力闘争であり、「都市人民戦争」とも呼ぶべき闘いである。人民大衆の巨大な海の中に敵権力を引き寄せその機動性を奪い、統制を乱し、無力化させることを目指す。それは、密集した大衆と組織部隊との結合した斗いであり、真の意味で中央権力を解体させるための大衆の武装した力―国家権力に対する我々の逆権力を作り出す突破口なのだ。だから、都市反乱斗争を工場占拠ゼネストへ、そしてその占拠を基礎にした二重権力から真の武装蜂起へと問題が設定されなければならないだろう。

われわれのこうした都市反乱闘争の提起は、現時点がすでに革命的危機の開始した時代に突入しており、日本における階級斗争の質が反乱斗争としての端緒についていることを前提としている。そして、それゆえ、革命的権力奪取の闘いをいかにして実現するのかという戦略的任務を内包した闘いとしてこれを主張しているのである。

その点をさらに明確にするために、まず、

1、工場占拠闘争の戦略的意義
　(a)ブルジョア国家権力の歴史的特質
　(b)工場占拠斗争ソヴエト権力
2、労働者階級内部における階級斗争
　(a)内部反乱の戦略的意義
　(b)その歴史的教訓
　　―ロシア革命とソヴエト内部の階級斗争―
3、学園占拠斗争の地位
　(a)学園バリケード斗争の発展
　(b)全共闘の革命独裁と労働者ソヴエト運動
　(c)現時点における全共闘の任務
4、都市反乱斗争の戦略的意義
　(a)一〇・二一と以降の新宿斗争
　(b)都市反乱斗争の意義
　(c)工場占拠ゼネストへの突破口とせよ！

以上の諸点についてまず明らかにしたい。

A、工場占拠ゼネスト・二重権力・武装蜂起

1、工場占拠闘争の戦略的意義

a、近代ブルジョア国家の歴史的特質

労働者階級の権力をいかに構築するのか、という点を明らかにするためには、まず打倒すべき権力の歴史的性格を再確認することからはじめなければならない。

言うまでもなく、近代ブルジョア国家は、他のあらゆる国家と同様に、階級支配のための組織された暴力としての普遍的性格をもつている。

だが、近代ブルジョア国家の本質的特徴・歴史的特質は次の点にある。

①資本主義社会の階級搾取が商品売買関係をとおして実現することを根拠にして「私有財産的法秩序」を原則とすること。

②そして、国家の実体は、この私有財産的法秩序を維持執行する機関としての中央集権的官僚執行権力ー全国的に組織された官僚・警察・軍隊ーであること。

③以上のことから、近代ブルジョア国家は、階級支配のための暴力組織が社会から分離し、社会の上にたつ公的権力の姿をとること、すなわち、歴史上はじめて、国家権力が個々の搾取過程を離れ、中央集権的に形成されるものとなつたこと、そして、それゆえに、科学技術の発展・兵器の著しい発達・集中された資本等によつて、史上最強の階級国家となつていること。

われわれは、こうした近代ブルジョア国家の特質を正しく把握した上で、いかにこれを打倒するのかについて明確にしなければならないであろう。

この課題に関しては、すでに一九世紀の後半に提起されていた。すなわちエンゲルスは、パリコンミューン以降の街頭戦を総括して、兵器の急速な発達と権力の強大化によつて、もはや伝統的なバリケード市街戦の単純なくり返しでは権力の打倒が困難となつたことを述べた。

そして、この主張は、永らく第二インターの改良主義指導部によつて、日和見主義的な歪曲が加えられた上で、暴力革命否認の論拠とされてきた。

そこで今日、われわれは、いかにして、階級国家の究極の形態をなし中央集権的強大性をもつたブルジョア国家を打倒しうるのかを迫られている。

明らかに、この敵の権力を打ち破るためには、数百万のプロレタリア大衆の武装が不可欠である。すなわち、ブルジョア武装権力に対する「プロレタリア武装権力」の構築が必要なのである。

だが、このプロレタリア大衆の武装権力はどのようにして構築できるのだろうか。

この問に対する歴史の回答は、今世紀の初頭、ロシア・プロレタリアートのソヴエト革命によつてはじめて全世界に発せられた。

b、工場占拠闘争とソヴエト権力

ロシア革命に登場したソヴエトは、労働者階級が工場・職場を基礎に武装した権力組織であつた。この権力によつてプロレタリアートは、ブルジョア権力を打倒することができたのである。

すなわち、生産過程において、数百万プロレタリア大衆が、自らの武装をはじめてなし遂げ、敵の職業的常備軍を、その大衆武装軍によつて打ち砕いたのだ。

では、なぜ、労働者階級は、自らの生産過程ではじめて武装を貫徹し権力を構築することができるのか。

それを可能にする根拠は、労働者階級自身がもつている。なぜならば、近代プロレタリアートこそ、生産過程を基礎にした組織体にほかならないからだ。すなわち、資本主義的商品経済は、中世的農村共同体を解体させ、農民大衆を土地と身分的隷属から分離させたが、同時に、資本は、自らの価値増殖活動を営むためには、こうした無産大衆を生産過程に産業軍として組織し、労働力商品として集約しなければならないからである。

従つて、労働者階級の闘争は必然的に「資本の生産過程」に対する反逆としての意味をもつ。そして、その反逆を貫徹しようとするならば、それは「工場・職場の占拠闘争」に発展せざるを得ない。なぜならば、生産過程における資本の支配を拒否するということは、具体的には資本の入格的表現である資本家・経営者とその手先である種々の職制を排除することになるからである。

ところで、この「工場占拠斗争」こそ、労働者階級の革命

的権力奪取の闘いの原点である。先にのべたプロレタリア大衆武装の出発点なのである。

というのは、「工場占拠」の行為は―それに起つた労働者の即自的意識のいかんにかかわらず―私有財産的ブルジョア秩序を根底から否定する反乱闘争を意味するからである。それゆえ、工場占拠斗争は、ブルジョア国家権力の介入やブルジョア秩序内反対派に安住してきた労働者階級内部のブルジョア分子の妨害などを必然的にもたらすであろう。権力の弾圧との対決、内部の階級闘争の貫徹をとおして、労働者の大衆武装は進む。すなわちそれは、武装占拠闘争へと発展し、それを担う闘争組織は、工場内部に革命独裁をうちたて、ブルジョア国家権力と対じした公然たる権力を主張する。ロシア革命において蜂起を決行したソヴエトは、まさにこの労働者の権力組織にほかならなかつた。

以上、われわれは、打倒すべき権力の基本性格と、それを行なう労働者階級の権力樹立に向けての「工場占拠斗争」の意義について確認してきた。そこでさらに問題を主体的に考えるならば、占拠斗争をいかに実現するか、ということである。それを解明するために、まず、労働者階級のこうした革命的反乱斗争への発展を妨げているものが一体何であるのか、という点について明らかにする必要がある。

2、労働者階級内部における階級斗争

a、内部反乱の戦略的意義

労働者階級の国家権力と資本に対する闘いを工場占拠闘争へと発展させることを妨げている最大の障害物は何か。

革命的な労働者にとつては、このことはとうに解りすぎるほどはつきり解つている。

それは、ほかならぬプロレタリア階級内部のブルジョア秩序派なのである。

現に進行している西独、フランス、イタリア、そして、日本における階級斗争は、いずれもその事実をあからさまにしているであろう。実際各国の労働者は、自ら闘争を行なうためには、組合官僚や社民指導部などの統制や彼らがブルジョアとの間で結んだ協定を下から打ち破りながら反乱する以外に道がなくなつてきている。

こうしたブルジョア秩序派―日本で言えば総評・同盟等の組合官僚とその「組合政治」としての議会指導部、社会党・民社党・日本共産党―が労働運動と議会に君臨してきたのは決して偶然そうなつたというわけではない。むしろ第一次大戦後のヨーロッパ、第二次大戦後の日本という現代帝国主義にあつては平時における普遍的特徴なのである。従つてその存在は、根拠をもつているのだ。

ブルジョア社会における階級関係の歴史的特質は、それが商品売買関係としてたちあらわれ社会の全成員を独立した私

的個人へと分解する。このことから、ブルジョアイデオロギーは、あらゆる個人に対する普遍的なイデオロギーとして支配的に存在しており、労働者階級と言えども深く日常的にその影響を受けている。社民・日共、組合官僚は、労働者階級自身が未だもつている、この組合主義的・民主主義的・議会主義的・平和主義的―一言でいえば―種々なブルジョア意識に基盤をおき、平時においては組合や議会での労働者に対する支配力を保持しているのだ。言いかえると、彼らは、労働者階級のブルジョア的意識の側面を自立化させた集団にほかならない。

従つて、激動の時代においては、彼らは、最も露骨な形で労働者階級の斗いの前進と革命的意識の自覚とを妨げる敵対物として姿をあらわにせざるを得ない。

労働者階級のブルジョア秩序派との闘争は、それゆえ、自らを自覚した階級として形成する斗いでもあり、その障害を打倒することなしには、自己の大衆武装の貫徹―その原点としての工場占拠闘争の貫徹―はなしえないであろう。

では、革命的労働者は、どのようにしてよくこのブルジョア秩序派を打ち破ることができるだろうか。

まず第一に、日本においてもすでに五〇年代後半から行われてきた斗い方として、組合内左翼反対派としての闘争がある。それは、組合官僚の提起する方針を左から突き上げ、組合大会における執行部選挙やストライキ投票でその成否を問うといつた方法で典型的に見られる。たしかに一般労働者の組合官僚に対する幻想が根強く存在するとき、この斗い方はその枠に従いながら左翼反対派を結集するのに有効な統一戦線戦術であろう。

だが今日、工場占拠闘争という反乱の課題が提起されている時、果してこうした斗い方だけで十分だろうか。

これと異なる第二の斗い方は、まさしく反乱の時代にふさわしい「内部反乱」としての闘争である。すなわち、組合官僚に対する闘争を、単に投票や会議での反対や不信の意志表示にとどまるのではなく、先進的労働者が直接ピケをはつたり、官僚の闘争抑圧を実力行動で粉砕するといつた斗い方である。フランス五月革命の初期における工場占拠ピケへの突入や、最近の日本における一連の反動的組合大会粉砕の闘争などがその端緒だといえるだろう。そして、現在、鋭く要求されている戦術の環こそこの「内部反乱」の斗い方であることは言うまでもない。

このような内部反乱闘争は、工場占拠闘争―プロレタリア大衆武装を直接、準備する闘争である。

組合官僚に対する実力行動の貫徹は、先進的労働者をきたえる。それによつて、国家権力との武装対峙を要求される工場占拠闘争に向けての部隊の結集と訓練（初歩的な武装）がはかられるであろう。

また、このような闘争の経験は、プロレタリア大衆全体を

従来の組合的枠のくびきから踏み出させ、そのエネルギーと活動力を大きく解放させていくであろう。すなわち、労働者階級の力は、投票を投じたり、幹部が請け負つたりするところでおしとどめられずに、自らの実力を行使することを知る。そして、それは「占拠ゼネスト」としてブルジョア社会を根底からゆるがす力にまで発展されるであろう。これこそ、労働者階級のいわば工場「全共斗」、職場「全共斗」運動にほかならない！

以上確認してきたような「内部反乱」の意義は、当面の工場占拠闘争への直接の準備斗争であるというだけではない。革命運動の歴史は、革命の死活にかかわるものとして、「内部反乱」の貫徹を迫つてきたのである。次に、そうした教訓を簡単にふりかえつておきたい。

b、内部内乱の歴史的教訓

―ロシア革命とソヴエト内部における階級闘争―

一九一七年、世界史にはじめてプロレタリア独裁の権力をうちたてたロシア革命の過程から、労働者階級内部における階級斗争の教訓を学びとる必要がある。

一七年二月、ツアー専制権力を打倒した反乱組織は疑いもなくソヴエトであつた。だが、反乱という行為に比して、それに結集した労働者兵士も、またロシアにおける革命の性格をブルジョア民主々義革命だという公認の見解をとつていた諸政治指導部も、著しくたちおくれていた。従つて、この時点におけるソヴエトは工場労働者、社会革命党員、メンシエヴイキおよびボルシエヴイキの単なる超党派的統一戦線組織でしかなかつた。

その結果、臨時政府は、ツアー専制に背を向けたブルジョアジーと官僚と「進歩的」地主を基盤としたブルジョア権力そのものとして存在し、ツアーの政府の合法的な後継者であつた。

メンシエヴイキと社会革命党は、このツアーなきツアー権力＝ブルジョア政府の存在を承認し、プロレタリア「合法反対派」として自らの地位を定めた。それは、未だ自己を権力として主張しえないソヴイエト大衆の遅れた意識の集中的表現であり、その限りで彼らはソヴイエト内多数派であつた。

これに対してボルシエヴイキはどのような態度をとつたであろうか。

カーメネフとスターリンに代表された当時のボルシエヴイキの在ロシア幹部は、「臨時政府が労働者階級と革命的農民層とを満足させる道に沿つて動く限りにおいてのみ、その行動を支持せよ」とした。だが、この立場は臨時政府に対してソヴイエトの圧力を加えるという政策を意味し、実質上、メンシエヴイキと何らしゅん別できるものではなかつた。すなわちボルシエヴイキは、ソヴエト内部のブルジョア的多数派との断固たる闘争を放棄したばかりか、自らもまた、合法反対派の地位に安住してしまつたのだ。その結果として、戦争と窮乏に憤激した大衆の革命的爆発力は自然発生的に放置されブルジョア政府の存続を許すこととなつた。

四月になつて特徴的な事態が二つ起きた。そして、これ以降ソヴエト大衆は、十月の蜂起に向つて革命的分解を遂げたのである。

第一の事態は、四月一八日の「ミリユーコフ覚書」によつてもたらされた。この書簡は、ブルジョア臨時政府が、革命のより以上の進行からの最終的防衛を連合国に求めており、そのために、対独帝国主義戦争をあくまで継続しようとしていることを暴露したものであつた。轟々たる非難の声とペトログラード大衆の示威デモがうたれ、ミリユーコフは外務大臣を辞任し、臨時政府が再編成された。新たに、六人の「公認社会主義者」がソヴエトを代表して大臣に加わることとなつた。だが彼らは、ブルジョアジーと旧官僚階級の支配する行政機構の囚人でしかなく、決してその政策を変えることはできなかつた。そして、ソヴエト大衆は、ようやく、彼らの指導部に対して不信を抱き分解を開始した。と同時にメンシエヴイキ、社会革命党自身もその内部を引き裂かれはじめたのである。

第二の事態は、レーニンの帰国によるボルシエヴイキの「大転換」であつた。レーニンは、二月革命のもたらした革命情勢を正確に把えていたほとんど唯一の革命家だつた。彼は到着と同時に「四月テーゼ」を発し、あらゆる機会を通してロシアが「臨時政府のブルジョア権力とソビエトのプロレタリアート・貧農による革命独裁との特殊な二重権力」にあることを明かにした。そして、「プロレタリアートの意識ならびに組織の不十分な結果としてブルジョアジーに権力を与えた革命の第一段階から、プロレタリアート・貧農の手中に権力を与えるべき革命の第二段階への移行」をボルシエヴイキの任務にせよと主張した。

このレーニンの主張は、はじめてロシアにおける社会主義革命の具体的構造を与えたものであり、当初は、ブルジョア民主主義革命に固執するボルシエヴイキ指導部の全てから拒絶された。だが、レーニンは、徹底した党内斗争を貫徹し、また、その後の全事態の推移が彼の主張の正しさを実証した。ソビエト大衆は、ボルシエヴイキが、ブルジョア連合政府と妥協せず、あらゆる犠牲を払つても帝国主義戦争に反対する唯一の党であることを知りはじめた。

こうして、レーニンの帰国後ボルシエヴイキは「大転換」を遂げたのだが、しかしその時点では彼らのソビエト内部における闘争の主軸は、まだ、大衆教育によるソビエト内多数派工作におかれていた。レーニンのいう「第二段階への移行」がもし真にボルシエヴイキの任務だとするならば、ソビエトは

蜂起のソビエトでなければならない。従つて、それは、革命派によるソビエト内部のブルジョア派に対する革命独裁が不可欠であつて、ボルシェビキは緊急に統一戦線型のソビエトに対し、敵の攻撃に反撃を加えながら、ソビエトの分解と革命的再編成を追求する内部斗争に移らなければならなかつた。この点に関する不徹底さは、以降の過程の中でボルシェビキ自身の内部に混乱と動揺を生みだしたのである。

六月に入つて事態はさらに進展した。大衆の戦争政策に対する不満は、相次ぐ攻撃命令と敗戦のくり返しによつてますます高まつていつた。とくにペトログラードの労働者は、もはや一刻もはやく権力を打倒するよう要求しはじめた。折から開かれた第一回全露ソビエト大会の形式的多数派は社会革命党とメンシェビキであつたが、街頭のデモンストレーションは、ほとんど全てがボルシェビキのスローガンを支持していた。

ボルシェビキは、六月九日に大規模なデモを計画した。ところが、全露大会の反対にあつてこれを中止してしまつた。逆に、多数派を中心に六月一八日にカンパニア・デモが組織された。そうしている間にも、臨時政府は連合国に迫られて新たに総攻撃令を出したため、ついに、七月三日、ペトログラード労働者の武装デモが起きた。この間、ボルシェビキは蜂起が時期尚早であるとして、デモを抑えつづけてきたが、結局有効な斗いを組織することに失敗した。すなわち、全露ソビエト大会とそれを支配する妥協主義者の全ロシア中央執行委員会に対する武装労働者の包囲・介入等の内部斗争はついに行われなかつたのである。

それゆえ、斗いの方向を見失なつたまま、ボルシェビキは政府軍の首都派遣と弾圧によつて打撃を受け、ソビエトも完全に空洞化されてしまつた。

だが、この危機に際して、思いがけないところから打開の瞬間が訪れた。ソヴエトの空洞化という隙をついて、コルニロフの率いる反革命反乱が起つたのだ。そして、この反革命の武力攻撃によつて無力さを暴露した臨時政府とメンシェヴイキ・社会革命党に対して、ボルシェヴイキは断固たる武力反撃と、ソヴエトの革命的再編とを推し進め、ペトログラードとモスクワの両主要都市のソヴエトで多数を確保した。

九月に入り、レーニンは武装蜂起を決意して全ボルシェヴイキ党員に檄を発した。トロツキーは、ペトログラード・ソヴエト議長につきその軍事革命委員会を組織し、急速に蜂起の準備にはいつた。そして、一〇月、第二回全露ソヴエト大会を前にして蜂起が決行されたのである。

だが、この時点にあつても、ボルシェヴイキ内部の混乱と動揺は解決されなかつたばかりか、その最高指導部の中に深刻な対立をはらんでいた。

周知のように、カーメネフとジノヴイエフは、蜂起そのものに対して反対であつた。たしかにレーニンの強力な指導性とプロレタリア兵士大衆の熱烈な革命への希求とによつてボルシェヴイキは蜂起を決定し実行することに成功した。だが動揺の根本的原因がボルシェヴイキ全体の「ソヴエト権力によるプロレタリア独裁ー社会主義革命」に関する不明確さにあつた以上、カーメネフたちの犯した誤謬と動揺はその集中的反映にすぎず、権力奪取後にまで続くものであつた。

最初に生じた問題は、「臨時（！）革命政府の構成」についてであつた。カーメネフ・ジノヴイエフ・ルイコフは、社会革命党やメンシェヴイキとの連合政府にあくまで固執した。レーニンとトロツキーは、そうした交渉や連合を無益なものとして放棄することを主張した。結果的にはこの時も、レーニンの主張が若干の政治的配慮を加えた上で採択されたが、中央委員、人民委員、政府幹部の一部が辞職するという大混乱をきたしたのである。

次いで、こうしたボルシェヴイキの矛盾をより一層華々しく示したのが「憲法制定議会の開催」であつた。メンシェヴイキの一人がいみじくも指摘したように「現情勢（一〇月蜂起）がブルジョア革命の一部分であるならば、憲法制定議会は完全に支持されてしかるべきであるし、またもし、それが事実社会主義革命であるならば、憲法制定議会は全く召集されるべきではない。」という問題であつた。社会主義革命を真正面から主張しえないボルシェヴイキは、一面では従来からの公約にしばられて渋々と、他面では内部に残されたブルジョア革命路線からの影響によつて、憲法制定議会の選挙を行なつた。そして、その結果は、社会革命党が絶対過半数を占め、ボルシェヴイキは総議席の四分の一程度でしかなかつた。この場合の決着は、武装水兵の一撃で片がつけられた。

以上の二つの事実ー「臨時革命政府の構成」をめぐる対立と「憲法制定議会」開催の誤りーは、ソヴエト内部における階級斗争に関してボルシェヴイキが極めて不十分で不徹底な対応しか行ないえなかつたことを物語つている。

権力奪取と同時にボルシェヴイキがただちに革命政府を名乗らず、自ら〝臨時〟という過渡的性格に甘んじていたこと、そして、一部に根強くソヴエト内部のブルジョア派との「連立」政権構想が試みられていたこと、憲法制定議会の選挙と召集によつて、蜂起に敵対したソヴエト内部のブルジョア派のみならず、本物のブルジョアジーの政党（カデット）にまで政治活動を保証し、彼らに形式民主主義上の優位性を与えさせてしまつたこと、ーこうした点は、全てボルシェヴイキが、ブルジョア民主主義革命のふるい戦略から決別しきつていなかつたことと、それゆえソヴエトによるプロレタリア独裁が単にブルジョアジーに対する独裁を行なうだけでなく

労働者階級内部のブルジョア秩序派に対しても独裁を行なわなければならないという点が不明確だつたことに起因している。

選挙の結果、憲法制定議会は、ブルジョアジーとブルジョア秩序派の両翼からするソビエト権力に対する反撃の拠点となつた。結局ボルシエビキは、これを武力で解散させ、それ以降の内戦の過程で事実上の革命独裁へと移行したのであつた。

だが、少なくとも次の点をわれわれは確認しておかなくてはならない。

第一に、内戦の際、反革命軍と干渉軍に、選挙の結果がこの上ない政治的口実を与えた。

第二に、ソビエト内部における革命独裁の不充分さは、実は同時に、ブルジョアに対する独裁の不徹底さを意味し、ブルジョア財産の収奪を慎重にさせたが、それは、内戦における反革命軍の物質的基盤を保障することとなつた。

第三に、こうした立遅れと生じた困難さは、ロシアを突破口とする全ヨーロッパ革命戦線の進撃にとつて（ドイツ革命の挫折とともに）手痛い後退をもたらした。

以上、プロレタリア革命に成功したロシアにおいてさえ、ソビエト内部の階級闘争がいかに不充分であつたか、逆にわれわれにとつては、その目的意識的追求がいかに重要であるか、ということを教訓としなければならないだろう。

その後、挫折したドイツ革命においても、敗北の最大の原因は、ローザルクセンブルグやリープクネヒトのスパルタカスプントが事実上社会民主党内の左派にとどまつており、それとの闘争を一貫して「民主主義的」枠内でしか行ないえなかつた点にあつた。

われわれは、こうした歴史的教訓をふまえて、今日提起されている「内部反乱」を、戦略的重要性をもつ戦術として貫徹する必要があるだろう。

次に、工場占拠ゼネストに向うもう一つの重大な環としての学園占拠闘争の意義について明きらかにしたい。

3、学園占拠闘争の地位

今まで確認してきた工場占拠ー二重権力ー武装蜂起に向けての展望の中で、学園占拠闘争はどのような地位を占めるであろうか。（この点については従来かなり述べられてきたのでここでは簡単にふれておきたい。）

a、学園占拠バリケード闘争の発展

学生戦線の闘いは、六七年の街頭実力行動を直接のきつかけとして、六八年から日大ー東大を軸とする学園バリケード闘争の全国的発展を遂げてきた。

五〇年代後半〜六〇年代前半にかけて闘われた戦闘的自治会（全学連）運動の蓄積を主体的条件とし、帝国主義の教育学園攻撃にさらされた学生運動が、他の全ての戦線に先がけて反乱闘争を切り開いたのである。

「学園占拠」の闘争形態は、それ以前の「学内闘争」ということばに表現されているような性格を一変させた。すなわち、「学園占拠闘争」は大学における既存のブルジョア秩序の破壊をもたらす。しかも、それは、街頭実力行動との相互促進的発展をとおして全国的に波及し、日本の全反乱戦線の重要な拠点を形成している。そして、ブルジョア執行権力との実力対峙と攻防戦を続けてきている。

だからこそ、支配階級は、警察権力の全てを動員して、この学園バリケードに対する攻撃を加えてきているのだ。

b、全共闘の革命独裁と労働者ソビエト運動

だが、学園占拠闘争が大学のブルジョア秩序の破壊を意味し反乱の拠点を形成する、ということは、

第一に、学園内部のブルジョア秩序派ー右翼、日共などーとの内部階級闘争を不可避とすること。

第二に、ブルジョア国家権力総体との対立を生み出し、官憲の介入との攻防戦をもたらすこと、

こうして、学園占拠＝反乱闘争の展開は、必然的にそれにふさわしい反乱組織の登場を要請する。それが「全共闘」組織にほかならない。

すでに周知のように「全共闘」は、これまでの自治会組織とは異なり、全員加盟制と形式民主主義の一人一票を建前としていない。

先進的部分の行動によつて結集する、闘う大衆の決議執行機関である。そして、それは、国家権力に対して実力闘争を貫徹するだけではなく、学内のブルジョア秩序派に対して革命独裁を主張する組織でなければならない。

こうして学園占拠闘争とそれを基礎にした全共闘の革命独裁の貫徹は、学園ソビエトの萌芽をつくり出すものであろう

だが学園におけるこのような反乱闘争とソビエト運動の成立は、労働者階級本隊の反乱とそのソビエト運動の成立なくしては、自ら完結することが出来ない。

何故ならば、全共闘が、学園占拠バリケード闘争に起つた闘う大衆の組織である以上、反乱が一時的部分的なものとしてとどまる限り、それは必然的に一時的・臨時的なものとならざるを得ない。

逆に云えば、学園占拠闘争が労働者階級本隊の全反乱闘争の内的な一翼となり、学園ソヴエト運動が工場ソヴエト運動の一部となつたときはじめて、全共闘は、反乱大衆の革命独

裁の権力として、(二重権力の一環として) 位置しうる。
この点を確認した上で、われわれは現に学園占拠斗争を闘っている全共斗が果さなければならない任務を明きらかにしたい。

c、現時点における全共斗の基本任務

今日、いかにして労働者階級の工場占拠・ソヴエト運動への突破口をきりひらくのか、という点に向けての基本的な全共斗の任務は一体何だろうか。

第一は、言うまでもなく、機動隊秩序下におかれた学園、反革命秩序派暴力の支配下におかれた学園においてバリケードる再構築することであろう。そして、空洞化している全共斗を斗争を通して再編成していくことにある。

第二は、全共斗相互の地域的結合をとおした共斗体制の確立、さらに、そこにおける中小企業労働者をはじめとする職場占拠ストライキへの参加、地域的労学共斗体制の組織化を追求することである。

第三は、現在、基幹労働者の中に作り出されようとしている組合官僚、社民・日共指導部に対する内部反乱に、大衆的に参加すること、それによつて、既成指導部の斗争収拾機構を粉砕し、労働者階級の真の斗争力を革命的に解き放つことであろう。

第四は、さまざまな労働者（組合内反対派・未組織労働者・下層プロレタリアなど）や高校生などの斗う力をひき出す新しい街頭斗争が追求されなければならない。それによつて権力の無力性を大衆的に暴露し、工場職場占拠への突破口となりうる闘争形態が問われているのだ。

そこで、この任務について、われわれはさらにたちいたつて考えてみる必要があるだろう。

4、都市反乱斗争（都市人民戦争）の戦略的意義

先にも述べたように、われわれは、安保階級闘争の質的飛躍をかちとるために「都市反乱斗争」を提起している。

この闘争の戦略的意義を明確にするに先立つて、昨年一〇・二一新宿斗争とそれ以降の斗いを簡単に総括しておかなければならない。

a、六八年一〇・二一とそれ以降の新宿斗争

一〇・二一新宿斗争の特徴は次の諸点であつた。

①学園占拠斗争に起ち上つた全共斗の学生部隊と反合斗争等職場実力斗争に決起しつつあつた労働者が大挙して新宿に結集し、それらを中心に駅占拠・街頭制圧斗争が斗いとられたこと。

②一〇・八斗争をきつかけにして、未組織状態にある労働

者・学生など数万の「群衆」や「暴徒」の自発的な斗争参加がかちとられたこと。

③こうした数万大衆による占拠・制圧斗争の結果、一万以上の大動員にもかかわらず、警察機動隊がその無力性を余すところなく暴露したこと。

これらが特徴点であつただろう。

さらに、問題としなければならないのは、一〇・二一斗争に秘められた可能性である。すなわち、都市の拠点における連続占拠斗争の可能性であり、それを突破口とした工場、職場占拠斗争への可能性であつた。

ところで、新宿斗争に関するもう一つの特色は、あらゆる組織が運動の成長と展開力にたちおくれた、ということであつた。

（だから、一〇・二一斗争が含んでいた可能性を具体的に実現するためには、たちおくれた「組織」がただちにこの点を明確にし、斗争を組織化し、それに目的意識性を与えていくことこそが問われていたのである。）

一〇・二一が明白にしたこれら全ての事実は、その後の新宿斗争の中にもはつきりと現われている。

一〇・二一斗争以降、新宿は都市反乱斗争の拠点として断続的に闘いが組まれてきた。当初は、フォークと集会だけに終始していたこの闘いも、権力の執ような介入と斗う労働者・学生の参加とによつて、次第に実力斗争へのたい動を開始したのである。

そして、それは、六月二八日の新宿西口郵便局における反合斗争と結びついて爆発した。

その意味で、まさに六・二八斗争は都市の拠点制圧斗争と職場の反合斗争が結合し、都市反乱ー職場占拠斗争への可能性をはつきり告げた。

その後、支配階級は危機感を強め、七月一九日からは、数千の機動隊を毎週配置して弾圧を強化しはじめた。だが斗いは、西口から東口へ、さらに、歌舞き町一帯へと、転戦を続け、権力はますます大衆的密集点に深くひきこまれてきているのである。

b、都市反乱斗争（都市人民戦争）の意義

こうした新宿斗争に代表される都市反乱斗争に対して、左翼諸セクトの諸君はどのように応えてきたのだろうか？

一〇・二一に関して彼らは自らの「防衛庁」デモや「国会」デモを一面的に強調し、独自に斗われた新宿斗争を「自然発生的な群衆の斗争」あるいは「急進市民主義でしかない斗争」といつた形で何ら評価してこなかつた。

こうした姿勢の中には、共産主義者としての「斗争形態」に対する原則的態度を欠いた誤りが存在している。

レーニンは、一九〇六年に書いた「パルチザン戦争」という論文の中で次のように述べている。「すべてのマルクス主

義者は、斗争形態の問題を考慮するにあたつて、どういう基本的要求を提出しなければならないであろうか？　第一に、マルクス主義は、運動を何か一つの特定の斗争形態にしばりつけない点で、すべての原始的な形態の社会主義とはちがつている。マルクス主義は、多種多様な斗争形態をみとめるものであるが、その際、それらの形態を「頭で考えだす」のではなく、運動の過程でおのずから発生する、革命的諸階級の斗争形態を普遍化し、組織し、それに意識性を与えるにすぎない。あらゆる抽象的な公式、あらゆる空論的な処方箋に無条件に反対するマルクス主義は、進行中の大衆斗争―それは、運動の発展、大衆の自覚の成長、経済的および政治的危機の激化にともなつて、たえず新しい、ますます多様な防禦と攻撃の方法を生み出す―に対して注意深い態度をとることを要求する。（以下略）」

ここでレーニンが主張しているのは、一九〇五年ロシア第一次革命の敗北後「ストルイピンの反動の時代」を迎えたロシアで、自然発生的に開始された「パルチザン斗争」に関連して「斗争形態」の一般的命題を述べたものである。

パルチザン斗争を、「無政府主義」や「ブランキズム」というレッテルを貼つて非難したメンシェヴイキや公式マルクス主義者に対して、レーニンは、むしろ、こうした斗争形態を指導できない党の弱さを指摘したのだ。

新宿斗争に起ち上つた「群衆」や「市民」と呼ばれている人々は一体何者なのだろうか？　そのほとんどが、労働者・学生・高校生ではないか。この斗いを「自然発生的な群衆」だとか「市民主義」だとかいつて切りすてるのは公式左翼の思い上りもはなはだしい。斗争形態に関するレーニンの主張を吟味し、ちようど一周年を迎えようとする昨年の一〇・二一斗争に主体的にかかわることが出来なかつたことを厳しく自己点検することは、今日全ての諸派にとつて決してむだなことではないだろう。

われわれは、プロレタリア人民の密集する都市の拠点において、大衆的な数段のバリケードを構築し、戦斗部隊によるパルチザン的な遊撃戦をそれと結合させ、都市反乱斗争を展開するのだ。敵の権力が包囲網を張つている人影まばらな官庁街やオフイス街に向けてデモを追いやる愚をくり返すのでなく、プロレタリア大衆の密集点で、敵の部隊を迎え撃つ戦術を追求することである。それは、人民の海の中で敵を寸断し、四方八方から叩き、粉砕するいわば都市人民戦争にほかならない。

われわれは、この斗いを貫徹することによつて、敵権力の無力性を大衆的に暴露し、結集し斗つた労働者・学生・高校生の全てに、全力をあげて工場・職場・学園における総反乱斗争をめざし進撃することを訴えるのだ。

c、安保粉砕・工場占拠ゼネストへの突破口とせよ！

だが、すでに確認したように、都市反乱斗争は、それ自身としては、大衆反乱に対するブルジョア国家権力の無力性を公然させること以上でも以下でもありえない。

真の革命斗争、すなわち、労働者階級みずから権力をもつてブルジョア権力を打倒する斗いは、工場占拠、生産管理、労働者の自己武装への発展をとげる以外にはない。

安保粉砕の都市反乱斗争の戦略的意義は、まさしく、その工場占拠斗争への突破口をつくり出すことである。

学園バリケード斗争の構築、労働者階級の内部反乱斗争の推進、都市反乱斗争の貫徹をとおして、われわれは全力を注いで、工場占拠ゼネストを追求しようではないか。

擬制の中央権力闘争か、工場占拠への突破口か

左翼諸派の階級的地位

1、ブンドの分派闘争は何を意味するか

―― 秋期決戦の課題と左翼諸派 ――

四・二八の総括をめぐつて急速に激化したブンドの分派闘争は、内ゲバをともないつつ、いまやそれぞれが独自の機関誌紙をもつ三つの分派へと公然と分裂するにいたつた・・・

左派＝赤軍派（機関誌「赤軍」）

中間派＝書記局派または中央派（「戦旗」）

右派＝中大派または三多摩ブンド

われわれが注目すべきは、その直接の原因である。すなわち、「赤軍派」が四・二八闘争の総括の上に立つて「三千名の武装部隊による権力中枢機関の占拠→首都全国大衆の覆ケ関での結合→臨時革命政府の樹立と全人民の武装・赤軍の建設→政府要人の逮捕」をこの六九年秋にやるべきだ、と主張したのに対して、同じ関西派の「書記局派」が「中大派」とともに「そこまではついて行けない」として官僚的弾圧にむかつたことである。さらにたちいつていえば、「赤軍派」は「中央権力闘争とは武装蜂起でなければならない、にもかかわらず（ブンドの他の二派は）中央権力へのカンパニア闘争にすりかえてしまつている」と主張し、これに対して「中大派」は「中央権力闘争とは(1)権力への抗議(2)権力の暴露(3)権力の奪取の三つあるがいまは(2)（暴露）だ」としてひらきなおり、「書記局派」は「武装中央権力闘争とマッセンストの結合」「佐藤帝国主義政府実力打倒」という具合に、「武装闘争」とカンパニア闘争主義を同居させている。

「中央権力闘争」をめぐるこうした論争は何を意味するのか？　ブンドの以上のような分派闘争の開始は、「中央権力闘争とマッセンスト」　がいまや現実の階級闘争の鉄火の試練にさらされていること、そして実践的破産を宣告されたことを意味しているだけではない。

四・二八をピークとする左翼諸派の「中央権力闘争」が完全に破産したこと、この破産をめぐつて左翼諸派の分解と再編成が大規模に開始されたことを意味する。

四・二八闘争の中途半ば性（挫折）の最大の原因は、「覆ケ関占拠」なる「中央権力闘争」の方針が具体的攻撃目標なのかそれとも宣伝スローガンなのか、あいまいな点にあつた。（「前衛」一〇号）結果的には新橋ー銀座の闘争になり、「覆ケ関占拠」は宣伝スローガンでしかなかつた。これは、口先では「中央権力への攻撃」をいいながら、実際にやつていることは「中央権力を暴露するためのカンパニア闘争」にすぎない、ということだ。「赤軍派」はまさにこの点をついて「中央権力闘争を文字通り中央権力との闘争＝武装蜂起による解体＝として貫徹せよ」と主張し、「独立派」は「暴露のためのカンパニア闘争でいいのだ」とひらきなおり、「書記局派」は理論的には「赤軍派」と同じだから認めざるをえないのだが「そこまではついて行けない」と右往左往している。

だからブンドの分派闘争、とくに赤軍派の登場は、「中央権力闘争」がカンパニア闘争にすぎなかつたこと、擬制の中央権力闘争にすぎなかつたことを暴露した、といえよう。

だが「中央権力闘争」はひとりブンドのみの方針ではない。四・二八を想起すればよい。中核をはじめ「八派連合」のことごとくのセクトが「覆ケ関占拠」をうたい、多くの全共闘もこれに追ずいしたのではなかつたか。そして八派連合や「全国全共闘」の「一一月決戦」は、この四・二八の延長としての「中央権力闘争」として設定されているのではないか。だとするならば「赤軍派」が「三千名の武装蜂起」論をもつてつきつけた批判は、ブンドのみならず、すべてのセクトおよびこれに追ずいする既成全共闘指導部の「中央権力闘争」の空文句化（カンパニア闘争化）に対する暴露と弾がいであつた。いいかえれば諸セクトの限界の自己暴露であつた。これが第一点である。

だがこの四・二八で暴露された擬制の「中央権力闘争」の破産は、中核派のように「おのれを肉弾として自覚する思想的決断」（「前進」九月八日号）といつた個人の決意の問題だけで解決しうるものではない（ちなみにこの「前進」論文では「なぜ四・二八においては新橋で一敗地にまみれたか」への回答として前記の自覚の問題をのべているのである）。

われわれにとつて重要なのは「中央権力闘争」を擬制のそれではなく「真の」中央権力闘争としてかちとるべき戦略戦術である。すなわちブンドの分派闘争の示した第二点は、日本階級闘争にとつて「権力問題」が窮極目標や原理的問題ではなく、まさに具体的日程にのぼせるべき戦術問題である（戦略の戦術化）こと、いいかえれば、プロレタリア権力の現実的登場による二重権力状態の開始が直接日程にのぼつてい

るというわれわれの主張（「前衛」一号の安保闘争テーゼはそうしたものとしてフランス五月革命型の工場占拠ゼネストを提起した）を諸セクトもまた認めざるをえなくなつてきているということである。「ソビエトが先か、武装蜂起が先か」という論争がブンドの分派闘争の一つの焦点となつていることはそれを示している。二重権力をいかにしてつくりだすか。さらにいえば「武装蜂起」はいかに準備されるべきか、という問題に諸セクトもまた目をつぶつているわけにはいかなくなつたのであり、「赤軍派」は「三千名の武装蜂起」なるマンガ的方針を出してこれに答えようとしたのである。

以上ブンドの分派闘争は、消極的には擬制の「中央権力闘争」の破産を、積極的には真の「権力闘争」はいかになされるべきか、という問題が、日本階級闘争の死活の問題になつたことを、示している。

2、赤軍派の擬制の「武装蜂起」

＝権力闘争とソビエト＝

「権力闘争」が日本階級闘争の中心問題になつた、ということの意味が、次の三つの側面から解明されなければならない。

第一に、プロレタリア権力とは何か、いいかえればソビエトとは何か。

第二に、現代帝国主義の危機の構造。

第三に、日本階級闘争の現局面の位置。

以上三点についての積極的展開は「A」でなされているので、ここでは、それを前提として左翼諸派の地位を確定することが目的になる。

まず擬制の「中央権力闘争」を左から批判し、「武装蜂起」を対置した赤軍派は何を意味するか。

赤軍派の「武装蜂起」論は次の諸点を前提ないし根拠にしている・・・・

㋑「ソビエトとは武装した労働者人民のコミューン四原則に貫かれた権力である」

「統一戦線の最高の形態としてのソビエト」（トロツキー）というソビエトの本質についての理解。また

「ロシア二月～一〇月のソビエトも二月の自然発生的武装蜂起による既存権力の解体の上に成立した」

「われわれはソビエトを物神化することはできない、ロシアでソビエトが反動化したこと、ドイツでソビエトができなかつたこと」云々、という歴史的総括の上に立つて「武装蜂起」による敵権力の解体抜きにはソビエトは決して成立しえない。

㋺過剰資本→市場再分割競争が、労働者国家の存在ゆえに「なし崩し市場再分割、危機のひきのばし」として行なわれてきたが、いまや限界にきている。このままでは恐慌→世界戦争の最高形態」という把握はソビエトの一側面の把握にすぎず、本質的規定ではない。「近代プロレタリアートの生産過程における武装叛乱組織」がソヴエトの本質である。十九世紀のコミューンは前近代的・職人的プロレタリアの職人共同体を基礎とした地域的武装叛乱組織であり、これとロシア一九〇五年革命で歴史的にはじめて登場したソヴエトは厳密に区別されねばならない。資本の歴史的作用によつて「労働生産主体一般」としての性格を獲得した近代プロレタリアの生産過程における武装叛乱こそ、現代帝国主義における根底的叛乱であり、ブルジョア国家権力に対して唯一とつてかわりうるものであり、また必然的に（自然生長的にということではない、歴史的性格からして必然的に、ということだ）共産主義に向かうものである。また「統一戦線の最高形態としてのソヴエト」というトロツキー的理解は、ソヴエトの前記のような本質に関する無理解からくる。統一戦線→ソヴエトという図式で考えるとソヴエトの共産主義的性格は「党による外部注入」によつてしか保証されないことになり、ひいては赤軍派のようにソヴエトの否定的評価が生まれることになる。ソヴエトの本質は大衆の「統一戦線」組織たる点にあるのではなく、「生産過程における武装叛乱組織」たる点にある。

㋩「プロレタリア権力」とはそもそも過程的なもの運動するものとしてしか存在しない（「国家の死滅」を考えればよい）

革命といくのでブルジョアジーは前もつてなし崩し的先行的ファシズムへの（民主主義体制からの）権力の再編とプロレタリアートのせん滅を決意せざるをえない。

㋥現局面でプロレタリアートは既存体制にぼう大な不満と自然発生性をもちながらもファシズムとの決戦に無自覚なまま反乱を開始している局面であり、「プロ独かファシズムか」の前段階的決着点である。

ここで注意すべきは赤軍派の「武装蜂起」は「前段階的武装蜂起」であつて、即プロ独の実現ではなく「内戦の開始」の出発点だとしていることである。じつはこの点に赤軍派の「武装蜂起」の実体が暴露されている。結論を先取りしていえば、赤軍派の実際的階級的意味は一非合法活動を公然とやるというチグハグさのゆえに権力によつてかい滅させられていなければ一都市武装ゲリラ戦ということである。すなわち赤軍派の「武装蜂起」論はじつさいには都市ゲリラ戦の主張（それ自体の意義は明確にされねばならない）にすぎないにもかかわらず、それを「国会占拠、政府要人逮捕」云々の文字通りの「武装蜂起、ブルジョア権力解体」と二重うつしにしているのである。

こうした赤軍派の混乱はどこから生ずるか。

まずソヴエト論について、つぎの三点が指摘されねばならない。

①ソヴエトの本質把握として「コミューン四原則」や「統一

のであるが、ソヴエトについても「できあがつたプロレタリア権力」というように静止的に考えることは出来ない。「ソヴエト運動」として考えねばならない。つまり、工場占拠ストライキ→生産管理・労働者武装→武装蜂起・ブルジョア国家権力の解体→ソヴエト独裁・世界革命戦争といつた全過程が「ソヴエト」であり、したがつてその性格も部分的萌芽的権力（これは生成壊滅を反復する）→二重権力の一方の極としての権力→独裁権力へと発展する。

③歴史的なことをいえば、ロシアではソヴエトが反動化したのではなくソヴエトが解体されたことが問題であり（ツアーの将校による赤衛軍、上部構造としての国家の復活）、ドイツ（一九一九～二三および一九二七～三三）では工場占拠→労働者武装を貫徹しなかつたことが問題であつて「武装蜂起」はむしろ何度も試みられその都度失敗しているのだ。

つまり「プロレタリア権力」には文字通りプロレタリアの権力ー運輸通信工場という資本主義的生産過程に密集するプロレタリアの武装権力、すなわちソヴエトー以外の何ものでもなく、したがつて権力斗争とは工場占拠（ソヴエトの萌芽）→その自衛武装・生産管理（二重権力の開始）→武装蜂起（ソヴエト独裁の樹立）という過程以外の何ものでもない。

歴史上いくつかの工場占拠斗争が武装蜂起にならずに敗北しており、近くはフランス五月革命にその挫折の例をみるがそれは工場占拠斗争のかかる二重権力の突破口としての意義を否定するものではない。

グラムシは一九二〇年のイタリア工場占拠斗争の敗北を「東方（ロシア）では国家権力がすべてで市民社会は弱いから機動戦＝武装蜂起が成功したが、西方（イタリア）では市民社会が発達しており、機動戦だけではかてない。陣地戦（経済斗争、一般的な政治斗争）によるプロレタリアの教育が必要だ」と総括した。権力斗争（二重権力）の突破口としての工場占拠ゼネストの革命的意義を否定するものは、すべてこのグラムシの「総括」に屈服しているといわねばならない。

――そこから「構造改革」にいくか、赤軍派のような「前段階蜂起」にいくかは別にして。（工場占拠斗争の歴史的総括は別の機会に展開したい。）工場占拠→自衛武装→武装蜂起へと斗争を発展させるための具体的諸条件こそが研究され解明されなければならないのである。

つまるところ赤軍派の権力斗争論は、プロレタリアの武装（＝ソヴエト）という現代革命の核心問題から、その困難性のゆえに逃亡し、「共産主義突撃隊」という代替物によつて問題をすりかえようとしているのだ。だが、まさにグラムシの指摘するように、「市民社会」をとおしてプロレタリアートに対する支配が強固にうち固められている現代帝国主義においては、少数の共産主義者の武装によつてはいかんともしがたいのであつて、プロレタリアートの武装を――それがどんなに困難であれ――獲得することなくして「権力斗争」は

それでは何が問題か。

ゲバラはその「ゲリラ戦争論」においてキューバ革命からひきだしたアメリカにおける革命運動の教訓として

(1)人民勢力は軍隊との闘いに勝てるということ。

(2)かならずしも革命の条件がすべてととのうまで待つ必要はなく、反乱の拠点でその条件をうみだせるということ。

(3)低開発のアメリカにおいて、武力闘争の本拠地は、基本的に農村でなければならないこと。

の三点をあげている。またゲリラ闘争は大衆の闘争、人民の闘争であり、地域住民の全面的な支援が不可欠の条件であり、そうした大衆の支援は、ゲリラ闘争が土地革命を遂行する点に根拠があることを指摘している。

高度に発達した工業国である日本においてもしゲリラ闘争を考えるとすれば、その大衆的基盤は農村ではなく都市工業プロレタリア（その予備軍としての学生をふくむ）でなければならないが、問題は依拠すべき大衆的基盤としての工業プロレタリアの階級的地位である。

周知のように日本プロレタリアも戦後民主主義体制なる階級協調体制の中に永らく包摂させられてきたのであり、ブルジョア権力による武力支配に直接さらされてきたわけではない。しかもこうした民主主義体制は、たんなる支配階級のイデオロギー注入の結果ではなく、商品売買秩序の維持による生産者からの搾取という特殊資本主義的階級支配形態に基礎

3、権力闘争の戦略と現代帝国主義論

六七年一〇・八羽田以来の安保階級闘争の昂揚が、四・二八ー六・一五において一定の壁に直面していることは、多言を要しまい。そこから一方では赤軍派的なゲリラ闘争路線に打開の道を求める傾向が生まれ、他方では六七年一〇・八以前にー平時の階級闘争にー逆もどりする傾向（構改系三派、反帝、革マル）がうまれている。

では、ラテン・アメリカ革命型のゲリラ闘争戦略が日本革命の戦略たりえないのはなぜか。

敵権力が、ラテン・アメリカ諸国に比してはるかに整備され強大でさらにその背後に米帝軍事力までひかえているからか。どこでも人口が密集していて地理的条件にめぐまれていないからか。

そうではない。敵権力の強大さや地理的条件はゲリラ戦略にとつて致命的条件ではない。

をもつているのであり、したがつてプロレタリアートは、こんにちのように民主主義体制がその国際条件の破綻（世界経済と米軍事どう喝体制の崩壊の開始）のゆえに動揺を開始してもなおかつそこから直ちに敵権力との武装斗争にはいるのではなく、むしろ現状維持への強い執着をもつているのだ。「社民」はその組織的表現であり、これまでのプロレタリアートの革命斗争は、ほとんど、ブルジョアジーの武力につぶされる前に、「社民」につぶされてきたのだ。これは農民の帰すうがブルジョア政府軍とゲリラ軍の軍事的力関係によつてのみきまるという（農村を本拠地とした）ゲリラ斗争と根本的に異なる点である。ここにこそ、ゲリラ戦士の独自的結集→ゲリラ戦の反ぷくとゲリラ部隊の拡大・敵権力への打撃→敵権力の最終的解体・権力奪取、というゲリラ戦の戦略がそのままでは日本に適用できない理由がある。

こうした問題を「権力斗争の条件論としての現代帝国主義論」として整理するならば、次の三点になろう。

①日本階級斗争が「平時の階級斗争」から「二重権力斗争を直接日程にのぼせる段階」にはいつたとはどういうことか ②権力斗争は何に対する権力斗争か（打倒目標は何か） ③権力斗争の主体は何か、である。

一　日本階級闘争において「権力闘争」が日程にのぼりつつあるというのはなぜか

――「なしくずしファシズムによる危機」か「民主主義体制の危機」か――

今日の左翼セクトの「戦略論」は、多かれ少なかれ「なしくずしファシズム論」である。すなわち、過剰資本の累積→帝国主義の市場分割競争の激化→日帝のアジア侵略、反革命への強い衝動→民主主義体制から帝国主義的独裁への権力の再編、という図式である。そして左翼セクトの論争は、せいぜいこの図式の枠内で、日帝のアジア侵略、反革命が米帝と対立するのかそれとも協調的に行われるのか、といつたものにすぎない。「植民地帝国主義」（中核派）といおうが、「なしくずし的先行的ファシズム」（ブント赤軍派・中央派）といおうが「帝国主義的再編」（ブント中大派）といおうが、内容的には同じ　①帝国主義の世界市場競争の激化、②民主主義体制ではそれに対応しえない、③だから帝国主義権力の再編（軍事力強化、プロレタリアへの独裁的支配の確立、ナショナリズム支配）に向う、ということである。

ところで世界資本主義が帝国主義段階に突入して以降、帝国主義相互の市場分割戦が緩和したことがあつただろうか。またブルジョアジーがプロレタリアへの支配強化をめざさな

なかつたことが一瞬たりともあつただろうか。帝国主義の競争激化とプロレタリアへの支配強化の策動は、帝国主義の一般的運動法則であつて、そこからはいま権力斗争が日程にのぼりつつあることはでてこない。

われわれが権力斗争を展望するのは、世界帝国主義の戦後体制とその一環としての日帝の戦後民主主義体制という国際的国内的階級協調体制の破綻をとおしてであることをはつきりさせねばならない。重要なのは現代帝国主義の「民主主義体制」とは単に　ブルジョアジーの階級独裁を超階級的にみせかけるための諸道具（民主主義イデオロギーや議会や投票箱）ではなく、戦争と革命が激動的に交替する現代帝国主義における特殊な階級関係――階級斗争の中途半端な結着の結果として成立するそれ自体過渡的な階級関係、両階級の妥協体制　だということである。そうした妥協的階級の破綻をとおして階級決戦――主体的には権力斗争――が日程にのぼるのだ。

この点を若干歴史的説明によつて補足すれば、一九世紀後半の重工業の発展は、一方において生産力と生産関係の矛盾の資本主義的処理（十年ごとの周期恐慌）を不可能ならしめそこから経済矛盾の政治軍事矛盾への転化（金融独占体の成立とそれを基礎とする帝国主義世界戦争）という帝国主義段階特有の世界経済と世界政治の関係を生みだした。他方においてそれは、近代大工業プロレタリアートをうみだし、資本主義はこの近代大工業プロレタリアートを経済的政治的に組織し動員しない限り存立しえなくなつたのである。それゆえ現代帝国主義の危機（矛盾）とは何よりもこのプロレタリアートの戦争への動員に関連して生ずる。敗戦帝国主義国におけるプロレタリアの動員体制の破綻は「戦後革命」をうみだし（一九一七年のロシア革命、一九一八年のドイツ革命、一九四五―四九年の日本等）、また、プロレタリアのあらたな動員の過程は革命と反革命の危機の過程でもあつた（一九三〇年代初頭のドイツ等）。

第一次大戦以降の現代帝国主義とは、一時的休戦期をはさみつつも戦争が永続する時代、「戦時期」と「休戦期」の繰り返し交替する時代である。そして「民主主義体制」とは、いつたん帝国主義戦争に動員されたプロレタリアートが（戦争による）動員体制の破綻→戦後革命→その半敗北をとおして体制内に包摂された体制であり、したがつてその特質は第一に「休戦期の階級関係」、第二に両階級の「妥協体制」たる点にある。

実際、イギリスで労働党が自由党の補足物たる地位から脱皮して第二党にのしあがつたのは第一次大戦後の一九二二年であり、アメリカ政府が「民主主義」なる文句をはじめて公式文書に使つたのは一九一七年（対独戦開始の文書）でありまたドイツのワイマール民主主義体制がドイツ第二帝国の敗戦とそれによる戦後革命（一九一八年十一月）の敗北をとお

して成立したことは周知のとおりである。そしてこれらの第一次大戦後の「民主主義体制」はいずれも①労働組合によるプロレタリアートの主要部分の組織化、②労働組合幹部および労働組合の議会代表部たる労働者政党のブルジョアジーとの取引（組合主義的労働運動と議会的政治斗争）をその内実としているのであつて、民主主義イデオロギーはこうした階級関係におけるフルジョア・プロレタリア両指導部の大衆結集政策のための旗印しにすぎない。

ふたたび当面する日本革命の問題にかえれば、戦後民主主義体制の国際条件――米軍事力による世界的どう喝体制、それと一体化したドル・ポンド経済体制――が崩壊を開始したこと、それによつて「社民」（組合主義・議会主義指導部）を媒介にしたプロレタリアートの体制内化（妥協的階級関係）が崩壊しつつあること、ここにこそわれわれは、日本階級斗争が「平時の階級斗争」から「権力斗争」の時代へと突入しつつあることを見なければならない。戦後民主主義体制の破綻をとおして権力斗争が日程にのぼること――こうした現代帝国主義に特有な権力斗争の条件はまた、権力斗争の打倒対象および主体の性格をも規定する。つぎにそれをみよう。

二　権力闘争の打倒目標は何か

――ファシズムか秩序派（ブルジョア執行権力独裁プラス社民）か――

「ファシズムは金融資本の暴力的支配形態である」という公式マルクス主義の定義では、ファシズムの反体制的反革命運動としての本質が抹殺されている。

ドイツの歴史は、民主主義体制→ファシズムではなく、民主主義体制（ワイマール連合政府）→官僚執行権力独裁（ブリューニング内閣時代の大統領独裁）→ファシズム（ナチスの反革命独裁）という発展を示している。つまり、ブルジョア的「法と秩序」の強権的維持体制としての大統領独裁に対する右からのぶちこわし――小ブルジョアとプロレタリアの一部を現状打破のニセ革命に動員した体制打破的反革命――としてナチスは登場したのであつて、これはブルジョア体制維持を本質とする大統領独裁＝ブルジョア執行権力独裁とは根本的に異なる。「ファシズム」を云々する際にはまずこの点がわきまえられねばならない。

ところで日本プロレタリアートが直面する敵は、反体制的反革命（ファシズム）か、それとも体制的反革命か。

「安保堅持」を基本政策とする自民党およびブルジョア執行権力は、いうまでもなく、体制維持＝現状維持勢力であり、現時点の特徴は、プロレタリアートの組合主義議会主義指導部との取引による現状維持（民主主義体制）から、官僚執行権力による「法と秩序」の強権的維持へと転化していることだ。ファシズムすなわち反体制的反革命はこうした官僚執行権力独裁による体制維持もまた破綻したときはじめて登場する歴史的舞台がつくられるのであるが、日本においていかなる政治勢力がその役割を担うかは、未だ予測する段階ではない。

プロレタリアートの当面する敵は、かくて、ファシズムではなく、ブルジョア官僚執行権力独裁であるが、そこで重要なのはプロレタリア既成指導部たる「社民」の位置である。かれらはドイツ社会民主党のように、民主主義体制の動揺に直面するやブルジョアジーとの「秩序派連合」に逃げこむほかないのだ。

このことは六八年フランス五月革命におけるCGT幹部＝仏共産党の対応にあらわれている。ナンテールのシド・アビアシオン航空機工場から始まつた工場占拠斗争の昂揚に対して、CGT幹部は「工場占拠」をさきどりして組合決定で「工場占拠」斗争に突入させ、実質的には組合統制下の圧力ストにすりかえようとした。さらに学生と青年労働者の接触をこん棒のピケで阻止し、最後には、ドゴールのどう喝の前に工場占拠斗争を解体させた。フランス五月革命を権力斗争からひきもどしたのはドゴールとCGT、すなわちブルジョア執行権力と「社民」の「秩序派連合」であつた。

日本の学園占拠斗争においては機動隊＝日共が秩序派連合を形成している。

かくて当面する権力斗争の対象は「法と秩序の維持」の前に肩をくむブルジョア官僚執行権力独裁と社民の「秩序派連合」であり、これは、大衆をエセ体制打破に結集するファシズムとは明確に区別されねばならない。

なぜなら、秩序派連合との斗争においては、社民支配下のプロレタリアートを武装叛乱に組織していくことは、プロレタリアートを法と秩序の防衛というブルジョア意識――その組織的表現としての社民――から解き放つことであり、それはプロレタリア大衆内部のブルジョア秩序派とプロレタリア秩序派（学園全共斗独裁、工場全共斗独裁）への大規模な分解――内乱――をとおしてしかありえないからである。

三　権力闘争の主体は何か

―― プロレタリア大衆武装か「共産主義突撃隊」か ――

かくて、革命主体としての、武装プロレタリアの集団の形成の過程は、大規模な内乱の過程であり、単にブルジョア国家権力（警察、自衛隊、官僚の執行権力独裁）との斗争であるばかりでなく、社民指導部との斗争――社民に組織的に代表されるプロレタリア階級内部の秩序派大衆との斗争――でもあるが、これはいかにしてなされるか。

プロレタリア階級の外部からの共産主義的宣伝煽動――共産主義の「外部注入」――によってか、プロレタリア自らの斗争の経験をとおしての階級としての自己形成によってか。

共産主義者の武装集団（「共産主義突撃隊」）の戦列にプロレタリアを一人また一人と加えてゆくことによってか、密集したプロレタリアの一挙的武装によってか。

ゲバラも総括しているように（「ゲリラ戦争」）、キューバ、中国、ベトナムのゲリラ戦の基礎は農民大衆であり、かつ農民の革命軍への結集の軸は生産手段たる土地に対する農民大衆の自己秩序（自己権力）の確立であつた。

帝国主義国における革命軍の差礎は工業プロレタリアであるが、その革命軍への結集の軸は、生産過程（工場）における自己秩序（自己権力）の形成である。それは、一面では、プロレタリア大衆自身のもつブルジョア意識との斗争――社民幹部との斗争、秩序派大衆との斗争――をとおしてはじめて実現される。他面では、プロレタリアのもつ本来的な階級意識――資本主義的階級関係の中では生産者と非生産者の関係が、いつさいの共同体的結合関係から解放されて単純化され、プロレタリアの反抗は生産者の非生産者に対する根底的反抗へとつき進む内的契機をひめている――に依拠し、それを物質化するということである。それは生産過程における大衆反乱――工場占拠・プロレタリア大衆武装・ソヴエト――を基本としなければならない。帝国主義国における武装共産主義者のゲリラ戦――むしろ都市ゲリラ戦をふくむ都市人民戦争でなければならないが――はただこうした生産過程におけるプロレタリアの叛乱をうみだすための媒介としてのみ戦略戦術的に設定される。

権力斗争の開始が前衛党に課する任務とは、学園・街頭・工場におけるゲリラ戦、大衆斗争、正規軍戦を結合した永続的二重権力斗争を組織することであるが、その戦略的中心は工場占拠→プロレタリア武装→ソヴエト権力の形成におかなければならない。

一〇・二一新宿都市人民戦争を突破口として

一一月佐藤訪米粉砕・交通線制圧・都市反乱

戦の爆発へ！

―― 六九年一〇―一一月闘争におけるわれわれの任務 ――

〈目　次〉

一、六九年秋を闘かうわれわれの任務

二、八月下旬～九月の諸闘争が新たに提起した諸問題

(イ)新宿解放闘争の教訓―都市人民戦争―

(ロ)広大―京大―九・三〇日大奪還闘争の教訓

―玉砕闘争の限界・攻撃的バリケード戦地区人民戦争への転化―

三、六七年以降の日本階級闘争の到達点・その直面している困難・それをめぐる諸党派の動揺とわれわれの立場

(イ)六七年以降の日本階級闘争の到達点

(ロ)日本階級闘争の直面している困難

―四・二八闘争における単純突撃闘争の挫折と「中央権力闘争論」の破産―

(ハ)羽田闘争以降の諸闘争の戦術的総括

a、羽田街頭戦の型
b、一〇・二一新宿反乱の示した巨大な可能性
c、一一・七に示された単純街頭突撃戦の限界
d、東大安田攻防戦における戦術上の諸問題
e、四・二八闘争の示した都市反乱の可能性

(二)四・二八闘争総括と一〇～一一月闘争方針をめぐる左翼諸党派の動揺と
われわれの立場
a、四・二八総括をめぐるブンドの三分解
b、赤軍派（パルチザン戦の単純延長線上に日本革命を設定する路線）
c、中核派（街頭突撃闘争の量的質的エスカレート路線）

四、一〇～一一月闘争をめぐる階級情勢とわれわれの任務及び行動方針
(イ)一〇～一一月闘争をめぐる階級情勢
(ロ)われわれの行動方針
1一〇・二一新宿都市人民戦争を突破口として、一一月佐藤訪米粉砕・交通線制圧・全都交通線分断・都市反乱の爆発へ！
(ハ)われわれの当面する任務
1学園占拠・都市反乱・組合官僚粉砕実力闘争から工場占拠ゼネストへ！

1、六九年秋を斗かうわれわれの任務

全国の同志諸君！

九・三〇日大奪還斗争は、遂に一〇・二一新宿都市反乱から一一月佐藤訪米阻止・全都交通線分断・都市人民戦争への現実的出発点・総進撃の蜂火を築いた。

見よ！

午後から夕刻にかけて三崎町ーお茶の水ー駿河台地区一帯を完全制圧下においた敵権力は、明大学館部隊の火えんびん斗争を合図とする数千学生大衆の遊撃戦と群衆戦の前に、遂に各所にスキをさらけだしたのではなかつたか。

それは、四・二八以降の街頭・都市戦の行きづまりに、はじめて大衆的突破口を切りひらいたのであり、従来の街頭単純突撃斗争路線の行きづまりに対しそれを打開する都市反乱の戦斗形態としての都市人民戦争路線を浮かび上らせたのであり、まさにそのことによつて一〇・二一新宿都市反乱を突破口とする一一月斗争への巨大な展望を浮かび上らせた。

全国の同志諸君！

一一月佐藤訪米において、沖縄・安保ー沖縄の日米相互防衛体制の形成ーとそれを突破口とするベトナム・アジア人民の階級斗争と日本階級斗争に対する日米両帝国主義を軸とした相互防衛抑圧体制の形成への動向が急展開しようとしている攻撃に対して、われわれが対置すべき斗争は今や明確となつた。

第一に、一〇・二一斗争において、五月下旬以降首尾一貫して展開してきた新宿解放斗争の成果をふまえ、新宿都市反乱斗争を実現することだ。

第二に、それを突破口として、一一月佐藤訪米阻止・交通線制圧・全都交通線分断・都市人民戦争を爆発させることだ

第三に、こうした安保斗争を無力なカンパニア斗争にすりかえることによつて裏切つている社民日共組合官僚に対する実力対決斗争を組織し、その組合官僚粉砕実力斗争をとおして安保粉砕工場職場実力反乱斗争を準備し、その突破口を切りひらくことだ。

同志諸君！

こうした総反乱ー都市反乱（都市人民戦争）とプロレタリア階級内部の秩序派に対する内部反乱ーこそは、実は、現代日本におけるプロレタリアソビエト革命への出発点たる工場占拠ゼネストへの突破口を切りひらく媒介に位地している。まさにその点に関わつて、秋に課せられた本質的任務を確認しようではないか。

これらのことは、擬制の中央権力斗争ー街頭突撃闘争の単純延長線上に革命を夢想する擬制の中央権力闘争ーに対し、われわれ自らが、工場占拠ゼネストー二重権力、武装蜂起へ向けての全社会的原点としての工場占拠ゼネストーへの突破口を切り拓く真の反乱闘争を準備し切りひらかなければならないということではないだろうか。

工場占拠ゼネストへ向けてこうした総反乱の現実的爆発を追求し、実現することー今こそそれをわれわれ自らが、その突破口を切りひらく主体的任務として、すなわちわれわれ自身の主体的党派的任務として設定しつくされなければならない。

戦闘的革命的労働者は　今や、プロレタリアソビエト権力樹立ー世界共産主義実現へ向けての真の目的意識的主体として、革命党派へと自己を打ち固めねばならない。

真の革命党派こそは、従つて、次の諸点を明確にさせたものでなければならない。

第一に、工場占拠闘争がソビエト革命への公然たる出発点＝原点であること、また日本革命の軍事綱領の根本は、工場労働者の直接武装（ソビエト武装）にあること、（その意識的核としての党の赤衛軍）から、日本革命の戦略戦術の基本を「工場占拠ゼネストー二重権力ー武装蜂起」として設定する。

第二に、日本のソビエト権力の死活的任務が、国内的にはブルジョアジーの即時かつ無条件の収奪と徹底した平等主義にあること、国際的にはアメリカ帝国主義に対する世界革命戦争の貫徹にあることを明確にさせ、その対米世界革命戦争の勝利的貫徹によるプロレタリア独裁の世界的樹立ー世界共産主義ーをわれわれの究極目標として設定する。

第三に、われわれは、そうした世界共産主義実現に向けての主体の結合体として自らを戦斗組織として打ち固め、開始された戦斗を決戦の戦闘ー武装蜂起ーに向け貫徹しぬくものとしてわれわれの組織的任務を設定する。

第四に、日本階級闘争の当面する環は、都市反乱・都市人民戦争の爆発および社民日共組合官僚粉砕労働者内部反乱闘争にあること、それこそが工場占拠闘争への媒介点にあることを明確に設定する。

第五に、それ故に今秋における任務を、一〇・二一新宿都市反乱闘争の実現、それを突破口とする一一月佐藤訪米阻止都市交通線制圧、全都交通線分断、都市人民戦争を爆発させること、に明確に設定することだ。

戦闘的革命的労働者学生諸君！

こうした明確な展望のもとに一〇・二一ー一一月闘争に向け総進撃を開始せよ！

そのために青年共産同盟を諸君のものとして組織し、結集せよ！

青年共産同盟を中核として、大衆行動委員会を組織し、それを安保共闘に結合せよ！

今やわれわれは、自らが一〇・二一ー一一月の戦闘配置につくことによつて、広範な活動家と大衆をその戦闘体形に組織していくことだ！

全国の労働者学生諸君！

青年共産同盟とともに、一〇・二一新宿都市反乱を突破口

七・一九闘争は、五月中旬以来の新宿解放闘争の巨大な爆発点を示すと共に、そのことによつて、四・二八以降一切が対国会カンパニアに流されていた左翼セクトの街頭カンパニア闘争に対して、反乱型街頭闘争の鋭い対置を示したのである。

その闘いは、敵の体制を積極的に混乱に陥し入れ、攻撃する武器とそれによつて武装された形の部隊を欠いていたという中での戦闘であつたにせよ、大衆が敵を分断し、包囲・袋叩きにしたというその展開は、都市における人民戦争の姿、萌芽を形作つたのであり、また敵権力のどう喝体制に対する都市密集点での人民戦争の巨大な可能性を示したのではなかつたか。

七月十九日の経過をみればその点は更に明瞭となる。

権力が新宿西口を完全制圧し、そこにおけるわれわれの何回かの抗戦が圧殺されたあと焦点は東口に移つた。

三千名のフォーク集会、数百名の安保共闘を中心とする集会とデモ、それらをとりまく二千ー三千の大衆ーこの東口広場の配置の中へ、権力が登場を開始した。（すなわち、権力が、大衆の中にひきずり込まれた形となつたのである）

その戦闘推移は、①圧倒的な大衆の中へのまず一少部分の権力の登場　②大衆による権力との対峙包囲関係の形成　③そこに対する安保共闘デモ隊の突入　④全体の気分の一挙的

都市人民戦争の爆発に向け、波とうの進撃を開始せよ！

2、八月下旬ー九月の諸闘争が新たに提起した諸問題

(イ)新宿解放闘争の総括と都市反乱の戦闘形態としての都市人民戦争

都市反乱闘争が、今秋の総反乱の中心的位置をしめていながらも、その位置づけ及び戦闘形態に関してセクト諸派は全く無自覚である。まさにそこから四・二八の挫折に鋭く表現される街頭戦のゆき詰まりが登場しているにもかかわらず、依然として彼等は、行き詰まつた従来の街頭単純突撃闘争の型に固執している。

従つて、今秋の都市反乱爆発のための具体的な行動方針を確定するためには、この都市反乱闘争の戦闘形態の深化が死活的問題である。

われわれは、そうした観点から、まず八月下旬の諸闘争が都市反乱の戦闘形態の深化という点に関わつて新たに提起した諸問題を掘り下げることから始めねばならない。

a、七・一九新宿東口解放闘争

七月十九日（土）の新宿東口解放闘争は、そのクライマックスにおいて、万を越す群衆が千を越す機動隊を分断し、一部的には彼等を包囲し袋叩きにし、さらにはバリケードをは

戦闘化 ⑤そのルツボの中への一〇〇〇をこす機動隊の登場群衆の対決的結集の拡大と群衆戦の様相への転化である。

そして、機動隊は、群衆の波のような動きの中に、分断されぼんろうされ、下部機動隊員がマヒし棒立ちになる状況が各地でくり返されたのであり、一部的には焦つて大衆の中にトビ込んでいく機動隊員が逆に袋叩きにされ、あるいは、大衆自らの手でバリケードが、中央口近辺に構築され、それが二重、三重、四重と張られながら、権力を押しつつそれを武器としながらの投石戦が展開されたのである。

こうして東口は、昨年一〇・八と一〇・二一以来の広大な解放的広場に転化したのである。

以上を総括すれば、

第一に、敵に積極的打撃を与える武器とそれによる遊撃部隊（二人組、三人組のバルチザン部隊）を欠くことによつて、爆発的反乱への転化には達しえなかつたとはいえ、（しかしこの点自身は、克服すべきポイントとして十分に踏まえられねばならない）

第二に、しかし全体としては、

①大衆による東口広場制圧

②その状況の中への権力の登場

③大衆による機動隊の分断、包囲という形での人民戦争の萌芽的段階を画したのである。

そして、この七・一九新宿解放闘争こそが、四・二八挫折以降七月に至る唯一の地区解放戦であり、地区制圧戦ー地区反乱戦であつたことをみせるならば、そこに展開された人民戦争形態こそが、四・二八に代表される従来の街頭単純突撃戦の限界を打破して、都市反乱のバクハツを切りひらく唯一の戦闘方法として今や総括されねばならない。

（註）そして九・三〇日大奪還闘争の全展開過程は、こうした七・一九の型を、攻撃的武器と街頭バリケードとその焼打ちによつて補足した性格である、といえることが出来る。

b、八・二三新宿歌舞伎町バリケード

七・一九新宿東口解放闘争のバクハツは、しかし同時に権力による西口ー東口の数千名機動隊による完全逆制圧への契機ともなつた。七月下旬以降、新宿解放闘争は、歌舞伎町コマ劇場前広場を拠点とする歌舞伎町解放↓新宿解放の闘争へと転化した。

八・二三の歌舞伎町バリケードは、こうした七月下旬以降の歌舞伎町を拠点とした苦闘に満ちた新宿解放闘争の集約点をなすものであつた。

安保共闘ー新宿共闘を中心とする部隊は、たしかにポリバケツを中心とした象徴的バリケードとしてではあつたが、歌舞伎町からの都電通り入口においてバリケードー投石戦を展開し最初の権力の攻撃を撃退することによつて、①六・二八西口を拠点とした市街戦、②七・一九東口における萌芽的人

民戦争にひき続いて、三度目のバリケードを新宿に登場させたのである。

では、この中からいかなる教訓をひき出すのか。

そのために闘争の簡単な経過を確認しておけば、

第一、デモに結集した部隊は一五〇弱、その後に二〇〇位の大衆

第二に、デモの先頭部隊によるバリケードの構築によつてバリケードをはさんでの大衆の結集が急速に拡大し、同時に権力の集結も進んだこと

第三に、バリケードとビンを中心とする投石によつて最初の敵の攻撃を粉砕し、追い散らしたこと、そしてその衝突と敵の後退によつて大衆の結集が飛躍的に進んだのである。

第四に、だが、体制をたてなおした二回目の権力の攻撃によつてバリケードは突破され、部隊は分散させられ、その先頭部分が逮捕されたこと、

第五に、そのことは、ビン・石をはじめとする味方の武器が最初の攻撃において使いつくされていたことにもよるが、しかし、より根本的には、大衆を動員してのバリケードの多層的設定を欠いていたこと、によるであろう。

従つて、以上のことからわれわれが導き出すべき戦術的ー軍事的ー教訓というのは、バリケード戦の意義とバリケードを軸とした戦闘体形の問題、言いかえれば、都市人民戦争における異体的な戦闘体形ー戦争配置ーの問題以外にはない。

すなわち、どく萌芽的・象徴的ではあつたにせよ、八・二三の歌舞伎町バリケードは、敵を攻撃する攻撃的バリケードとしての性格をもつたのであり、その多層化をおし進めるならば、それは敵の部隊配置を乱し、敵を分散させつつ、大衆の中にひき入れ彼らを包囲するという〃攻撃的バリケードの性格〃を全面化しうるということである。

同志諸君！

だからわれわれの結論はこうだ。

七・一九東口解放闘争が、新宿都市反乱闘争のバクハツへの現実性を示し、また都市人民戦争の問題を提起したとすれば、八・二三歌舞伎町バリケード戦は、都市人民戦争における、バリケードの新たな意義と味方の攻撃体制の配置の問題をつき出したということであり、秋の都市反乱のバクハツは、この主体的実践の上にのみ構築されるーということだ。

(ロ)広大ー京大ー九・三〇日大奪還バリケード戦の教訓

玉砕型抵抗戦の限界・攻撃的バリケード戦から地区人民戦争へ

八月下旬の広大闘争は、学園闘争の戦術に新たな問題を提起した。それは、①一部徹底抗戦部隊と大衆的野戦との結合②防衛手段としての火と油の使用である。

九月中旬の京大闘争は、広大闘争のこうした闘争形態を学園のみならず、積極的に学外地区に波及させ、また敵の攻撃

スケジュールの設定以前に攻撃的バリケード戦にのり出し、その焼打ちによる市街戦へと発展させたのである。

そして、九・三〇日大奪還闘争の主戦場は、明大学内から、お茶の水ー駿河台・神田地区一帯へと移り、数千名の学生大衆による遊撃戦は、機動隊の分断化と部分的攻撃をも生み出し、京大型が、広大な地帯において展開されるという成果を生み出したのである。

従つて、こうした八月下旬からの九・三〇にいたる学園攻防バリケード戦は、もはや学園の枠をのりこえた都市反乱戦の分野に公然と拡大していくプロセスをなしたのであり、従つてその総括は、ひとり学園バリケード戦への教訓のみならず、まさしく一〇～一一月の都市反乱戦への教訓に直結する問題なのである。

a、広大闘争の型はどういうものであつたのか。

その第一は、活動家の一部二九名による玉砕徹底抗戦

第二は、バリケードの周囲における油と火の使用

第三は、キャンパスに結集した三千名の大衆をバックとした野戦ー以上の三点にその特徴は要約しうるであろう。

そしてわれわれは、こうした広大における抗戦が、たしかに一月東大以来、相次ぐ後退を重ねてきた学園バリケード戦において、ともかくもその七ケ月間のずるずるべつたりの後退の後において、はじめて登場した抗戦であるという事実をみておかねばならない。そしてまた、キャンパスにおける大衆を背とした野戦の展開は、「全活動家の竜城ーキャンパス内からの大衆の閉め出し」という一月東大安田型を越える積極面であり、火と油の使用も防衛的ではあるにしても初めて登場した新たな武器として評価されねばならない。

ところで中核派は、この広大闘争を二九名の玉砕抗戦という点において総括し、「第二、第三の広大を」とした。だがこの彼らの総括は①野戦との結合、②火と油の意義という新たな問題を逆に過少評価し、安田型の単純延長上にのみ問題をみるという傾向を強くもつているといわざるをえない。

b、左翼諸党派の広大闘争総括の限界と九月上旬の学園徹底抗戦問題をめぐるわれわれの教訓

従つて八月下旬から九月上旬にかけての学生戦線の直面した激動的問題は、「第二、第三の広大を！（ー第二、第三の小安田をー第二、第三の玉砕闘争を）」という形で、一斉に問題を提起した中核派の路線を克服して、大学立法の施行をバックとした権力と学校当局のロックアウト攻撃に対し、いかに闘うか、という問題であつた。

そして、法政における八・三〇ロックアウト問題を通してわれわれが右余曲折を経ながらも、明確にした諸問題は、さらに広大型をのりこえなければならない、ということであつた。

確かに広大闘争は、小規模ながら東大安田型をのりこえる

積極的側面を示した。だがその総括を他の側面ー東大安田の小型版ーから基本的に行なうということは、学園攻防戦の展望を切りひらくことには決してなりえないからである。

なぜならば、そうした形の数十名の活動家による玉砕闘争は、確かに何らの抵抗もなくロックアウトに明け渡すことに比較すれば「反対の姿勢を全社会に示した」という意義は高いものではなるが、しかし、そうした玉砕闘争を主要側面とした戦術は、つきつめれば敗け方の選択であり、当初から敗北を前提としたところの、しかも全員玉砕のうえでの敗北を前提としたところの闘争なのであり、それはまた「敵への打撃を最大にし、味方の犠牲を最小にする」という軍事的法則にも反する闘争方法であるといわねばならない、からである。

そして、九・三の早大第二学館と大隅公堂をめぐる闘争は、実はそうした玉砕カンパニア闘争の限界と無力性を逆に暴露させたのであつた。その闘争は、ことの初めからして〝何時間持つのか〟という問題にしかなりえなかつたのであり、また権力にとつてみても、それは現権力体制の内部で処理しうる闘争であつたのである。

では、現在の学園攻防戦においてはこうした敗北を前提にした、玉砕闘争しか、ありえないのか。実は広大闘争こそ、それに対する新たな可能性を呈示したのではなかつたのか。大学当局、権力に対して、彼らの弾圧体制をシンカンさせ、それを打破する対決の方法はありえないのかーこの問題こそが、八月下旬の法政においてわれわれが、鋭く直面した問題なのであつた。だから広大闘争に現われた火の油のバリケードキャンパスの野線は、玉砕型抗戦カンパニアの補足物から徹底的に分離させ、革命的闘争戦術の一環へと独自に発展させられる必要があるということであつた。

では、革命的闘争戦術とは何か。

それは、大学当局と社会全体に対する根底からの挑戦以外にありえない。

すなわち、学内におけるバリケードの多層的設定、そのバリケードの街頭への拡大ー学園バリケード戦の地区バリケード戦への拡大・学園占拠闘争と街頭制圧戦との結合ーである。

それはより具体的には広島で防衛の手段として登場した諸手段を、バリケード防衛の手段として使うという次元から、攻撃の武器として使うということであり、そのことは同時に、バリケード自体を攻撃の武器として位置づけ直すということー防衛的学園バリケードから、攻撃的学園バリケードへの転化ーであり、そうした攻撃的バリケード戦の街頭への波及戦を意味する。

c、京大闘争の切りひらいた新たな水準

このようなわれわれ自身の広大闘争の総括と法政ロックアウト問題を契機に発展させたわれわれの教訓を踏まえた時に、九月中旬の京大バリケード闘争の重大な意義が鋭く浮かび上つてくる。

従つて従来の（安田以降の）学園攻防戦に対する京大闘争の鋭い特徴的質を確認するならば、

第一に玉砕抗戦（八名）の位地は、闘争全体の中において象徴的位地にすぎなかつたこと、

第二に、闘争の設定をわれわれの側から攻撃的になしたこと、すなわち、敵の動きの端緒的開始に対して、街頭バリケードの流動的設定をもつてわれわれの側から戦闘を開始したこと、

第三に、従つて以上の第二点及び第一点の中から言いうるように、そこには籠城的防衛的バリケードの性格は希薄であり、学園から街頭に波及したバリケードは攻撃的であつたこと、

第四に、しかもそのバリケードの内側にほ数百名の全戦闘部隊がひかえ、そのバリケードは大衆的戦闘部隊による文字通り攻撃の武器となつたこと（焼打ち）

第五に、こうした攻撃的バリケード戦が京大周辺地区一帯においてくりかえし流動的に展開され、そのことによつて、学園バリケード戦と市街戦（地区制圧戦）が結合されたこと、すなわち、闘争全体の階級的性格が都市反乱の一部となりうる可能性を示したこと（だが、京大周辺は都市密集点ではないということによつてそれは現実的都市反乱に転化しえる条件はない）である。

従つてわれわれは、次の三点を深く確認せねばならない。

第一、京大闘争の展開は、われわれの広大闘争総括および法政ロックアウト問題を契機としたわれわれの教訓と切り結んでいること、

第二、それは広大闘争のもつ二側面ー玉砕闘争の側面と従来の玉砕闘争をこえる可能的積極面ーの内の後者を引き出しそれを学園の枠をこえて発展させた水準を形作つたこと、

第三、そのことによつて、学園バリケード戦が、客観的には都市反乱戦の一角に転化したこと。

d、九・三〇日大奪還お茶の水・駿河台・神田地区制圧戦と都市人民戦争

そして九・三〇日大奪還闘争こそは、京大闘争が示したこうした客観的可能性ー学園バリケード戦の都市反乱戦への発展の可能性ーを広大な地域において現実化したのではなかつたか。

また、まさしくそのことによつて、四・二八以降の街頭戦の行き詰まりを打開する方向性ー都市人民戦争ーを一〇・二一ー一一月闘争に向けて指し示したのではなかつたか。

九・三〇闘争の特徴的事実を総括すれば、

第一に、敵権力の明大学館に対する先制攻撃ー闘争拠点の破壊攻撃ーと、部隊集結点ー三崎町・明大学館・本館ーの早期封鎖体制、

第二に、その結果として①明大学館・本館の部隊、②それを包囲し完全封鎖する機動隊ー機動隊によるお茶の水・駿河

台通りの制圧ー③その機動隊と全般的に対峙する学生大衆部隊、という配置を生み出したこと、

第三に、学館部隊の火えんビン使用は、まさに、こうした膠着した戦線配置における敵味方をして真に一挙に流動化させる戦闘開始の合図となつたこと、

第四に、主戦場は、駿河台通り、駿河台下、中大ー日大間お茶の水駅周辺にわたり、その主要闘争形態は、ノンヘル学生大衆部隊による遊撃戦・群衆戦であつたこと、

第五に、各地において街頭バリケード、自動車炎上が闘争の武器として広範に使われたこと、

第六、以上の結果として、午後から夕方に至るまで機動隊の戒厳体制制圧下におかれた駿河台通りにまでスキが生まれたこと、すなわち、機動隊は学生大衆と群衆の広範な動きに分断させられ、彼らの中においてさえもスキを生んだこと、（パトカーおよび機動隊員の袋叩き）である。

従つて、九・三〇の意義は、バリケード再構築闘争が地区制圧戦に転化したこと、その遊撃戦と群衆戦の結合の前には機動隊秩序の限界を露呈させたこと、従つてそれは都市人民戦争の現実的出発点を築いたということであり、まさにそのことによつて、一〇・二一新宿都市反乱と一一月闘争への大衆的出発点を切り開いたということだ。

いいかえれば、七・一九新宿東口解放闘争が、お茶の水地区一帯において再現されたこと、しかもより一歩高い水準に

3、六七年以降の日本階級闘争の到達点・その直面している困難・その打開をめぐる諸党派の動揺とわれわれの立場

われわれが、ここにおいて、第一に砂川・羽田以降の日本階級闘争の成果および到達点をまず再確認しようとするのは今秋において、さらに何を達成しなければならないのか、という今秋の闘争の本質的任務を設定しようとするためにである。

(1)今まで何を達成してきたのか、従つて、それをふまえて更に何を追求するのか、(2)そのためには、いかなる困難を打開しなければならないのか、(3)それをめぐつていかなる党派闘争が展開されているのかーわれわれは、こうした形で日本階級闘争のこの間の総括を再確認しなければならない。

(イ) 六七年以降の日本階級闘争の到達点およびその成果

まず六七年砂川・羽田以降今日に至る日本階級闘争の成果を簡単に確定するならば、

第一に、安保闘争は基地をめぐる実力闘争として登場し発展したこと、その中において従来のカンパニア的闘争形態と

は本質的に異なる革命的闘争形態の根本をなす〃占拠〃闘争がまず基地周辺の街頭から〃街頭占拠戦＝街頭・地区制圧戦〃として登場し（砂川）たのであり、それが二度の羽田から佐世保へと急激な発展を遂げたこと、またその制圧戦にともなう〃武装〃の端緒的登場、

第二に、その街頭制圧・街頭反乱闘争が、プロレタリア階級の特殊な一部＝学生の内部に還元・還流されて、それが内部反乱＝学園占拠・学園反乱へと転化し、爆発し（日大）、全国化を遂げたこと、

第三に、その学園反乱・占拠闘争を基礎とした大衆反乱組織＝全共闘が、平時の自治会組織から分離して成長を遂げたこと、すなわちソビエト運動の端緒が学生ソビエト運動として始まつたこと

第四に、そこから学園を基礎とする対日共民青内部階級闘争が巨大な展開力を示し、それを通して学生大衆武装が発展したこと、その結果として対日共・対学校権力の全共闘革命独裁が事実上は多かれ少なかれ開始されたこと、

第五に、以上のような学園反乱を主要な原動力としつつ、昨年一〇・二一新宿は、都市反乱の爆発と持続の可能性を示したこと、

第六に、反戦青年委運動ー組合内左翼反対派運動から労働者ソヴエト運動への過渡的形態ーの全都全国的拡大と普遍化、

第七に、工場占拠闘争への戦略的環をなす工場職場内内ゲバ闘争ー対社民反乱闘争ーが、萌芽的登場（三月動労千葉のバリケード闘争、六・二八全逓新宿西口闘争、対出版労協粉砕闘争等）と波及を示しつつあること、ーおよそ以上に要約しうるであろう。

そしてまた以上を結論的に総括するならば、日本階級闘争の到達点及びその成果とは、街頭地区反乱が学園内部の反乱へと還元され爆発し、そこから学園ソヴエトが登場したことその学園とは、生産過程（工場・職場）に対する予備過程にほかならぬこと、従つて学園反乱の本質的階級的性格は、工場職場反乱への予備反乱であること、それゆえ、日本階級闘争の到達点のつき出している本質的問題は、こうした予備過程における反乱とソヴエト運動から、ブルジョア社会の根底＝生産過程における反乱とそこでの占拠闘争、ソヴエト運動へと転化させること、まさにそれによつて、武装蜂起の直接的前提たる二重権力段階を切りひらくこと、にこそあるのである。

そしてまた、こうした学園反乱・学園ソヴエトから工場占拠・工場ソヴエトへの転化の媒介に、実は六七年ー六八年次元の街頭・地区制圧戦の範囲を越えた都市反乱の爆発の問題と、反戦青年委運動の過渡的性格を止揚する職場工場内部の社民日共・組合官僚粉砕実力闘争の問題が横たわつているのである。

では、こうした日本階級闘争の制圧戦・反乱戦・ソヴエトストの段階に発展させるためにわれわれはいかなる困難の打開に直面しているのか。

(ロ)日本階級闘争の直面している困難

日本階級闘争の直面している困難ーそれは、こうした学園反乱から工場職場反乱への転化にともなう困難そのものであり、より具体的には、その媒介をなす都市反乱（都市人民戦争）と社民粉砕内部階級闘争を今日の左翼諸派全体が明確に設定しえないというところから発生している反乱戦線内部の既成の左翼八派協の危機的困難として、すなわち、左翼諸派のこれまでの街頭単純突撃闘争路線そのものの行きづまりと困難として存在している。

われわれが打開すべき日本階級闘争の困難は、具体的には四・二八闘争の中に圧縮的に指し示されている。その厳密な分析は従つて、秋を真剣に闘う者にとつてはさけてはならない義務である。

そのために、四・二八の特徴的事実を再確認してみるならば、

第一にそれは、学園反乱からの反乱戦線の拡大ー全国学園・高校・反戦青年委ーを背景としていたこと、

第二に、その中軸をしめたのは中核派であり（補足的にブンド）、

そのスローガンは、官庁街占拠（中核）、霞ケ関占拠（ブンド）であつたこと、

第三、以上第一、第二の要因の結果として、権力は中央官庁街に主力を配置し、そこでの防衛の体制をしいたこと、だが、その結果として中央官庁街以外の地帯は〃警備力の限界〃地帯となつたこと、

第四、左翼は、東京ー新橋ー有楽町の交通線を単に出撃拠点として設定しただけで、その交通線の制圧・分断を行動目標としえずに、その結果、単純突撃を敵の主力に対して若干試みたにすぎなかつたこと、しかし、敵の主力に対する左翼活動家部隊の単純突撃は、ただの一度も敵を突破しうることなく、逆にその無力性を暴露したにすぎなかつたこと、

第五、従つて闘争の集約点は、敵の警備力の限界地帯ー銀座・東京間ーにおける〃擬制の解放区闘争〃へとならざるをえなかつたことーである。

それゆえ以上の諸事実から言いうることは、まず何よりも官街占拠・霞ケ関占拠を直接の行動目標とした中核・ブンド両派の坐折であり、理論的には「中央権力闘争論」の破綻、である。

そしてより本質的には、中核・ブンド両派が代表していた従来の街頭戦の路線ー敵の主力部隊に対する活動家部隊の単純突撃闘争路線ーの挫折であり、その路線の無力性のバクロと破綻なのであつた。

こうした四・二八闘争の挫折は、それ以降の街頭闘争の無

力性として固定化した。事実、中核・ブンドを中心とする五派協は、五月末の愛知訪米闘争から完全に招還したというだけではない。大学立法反対の統一行動は　対国会カンパニアデモのくり返しに終始したのであり、そのことは、彼らの中にあつては〝街頭単純突撃闘争か、街頭カンパニアか〟の二者択一しか存在していないこと、それ以外のいかなる反乱型戦闘形態も選択の対象にはいつていないこと、である。

まさに、四・二八挫折以降の全過程は、カンパニア運動への低迷として一言にて特徴付けられるのであつて、八派協の運動の中からは、こうした四・二八の挫折とそれ以降の低迷を打破する闘争形態の新たな萌芽は、何も生まれてはこなかつたのである。従つて、そうした点から言うならば、先にわれわれが確認した新宿闘争の一連のピークー西口を拠点とした六・二八全遁新宿闘争、東口を拠点とした七・一九東口解放闘争、歌舞伎町を拠点とした八・二三バリケード闘争ーと九・三〇日大奪還お茶の水・駿河台戦とが切りひらいたものこそ、実は、四・二八の街頭戦とは異質であり、また四・二八の敵の主力に対する単純突撃闘争型の行きづまりを突破する新たな反乱路線への萌芽であるといいうるのである。

そればかりではない。

四・二八が、敵の主力の配置線に対する左翼活動家部隊のこの街頭戦を〝戦闘配置〟の問題に絞つてみれば、敵の主力部隊の阻止線に対して、左翼活動家部隊が組織的突撃を敢行しくり返したことに特徴があり、その突撃戦が街頭占拠戦を切り開きえたのは、根本的には、敵の部隊配置および装備が平時のカンパニアデモに対するそれの継続であり、それをこえるものではなかつたこと、それに対してわれわれの側が武装（棒・石）の公然化によつてカンパニアデモの域を質的に一歩先にのりこえた、という点にある。

従つて、敵の主力配置に対する味方の組織部隊の突撃による打撃力は、以上の要因によつて羽田闘争の街頭制圧戦の基軸をなしたのであり、それによつて、日本階級闘争を、従来のカンパニアーないし実力カンパニアーの段階から、まず街頭において反乱（占拠・武装）闘争の段階への転機を画す基軸をなしたのである。だが、そうした巨大な衝撃力につき動かされる余り逆にこうした羽田闘争の街頭戦の型を絶対化ししかも単に街頭戦の型として絶対化するというだけではなく革命の型にまでまつりあげたもの、ブンドの「中央権力闘争論」に他ならなかつた。

ところで、ここでわれわれがはつきりと再確認させておかなければならない事は、敵の主力に対する組織部隊の突撃闘争の型は、しかしすでに六八年三月、一〇・三一の成田闘争において、単なるその単純なくり返しによつては、街頭制圧戦の貫徹力たりえない、ということを露呈させていたという単純突撃闘争の挫折であつたということは、そうした街頭路線の単純延長線上に革命を夢想している部分（中央権力闘争）の深刻な内部対立へと転化せざるをえなかつた。中央権力闘争論の破産とブンドの三極分解がそれである。

こうした四・二八闘争の挫折と、にもかかわらず左翼諸派のそれへの固執状況は、そうした現状を革命的に打開しぬくためのこの間の階級闘争の戦術的軍事的総括を改めて要請していると言つていいだろう。

(ハ)　羽田以降の戦術（軍事）的総括

a、羽田闘争の街頭戦の型ーその巨大な意義とその固定化の限界

一〇・八と一一・一二の羽田闘争、とりわけ一一・一二の羽田闘争は、日本の階級闘争に対して画期的地平を切りひらいた。それは先にも確認したとおり、街頭占拠。街頭制圧戦が何よりもブルジョア国家権力に支えられたブルジョア秩序に対する反乱として公然と始まつたからであり、またそれにともなつて武装の端緒が切り開かれたからである。

すなわち、三千に近い学生活動家の全国的結集とそのゲバ棒による部隊武装は、警棒と若干のガス銃を基本とした権力の主力配置に対する、そのくり返す突撃闘争によつて、敵の配置を乱し、国家権威とその街頭秩序に打撃を与え、街頭制圧戦へ広範な大衆を結集する道を切り開いたのである。

ことである。敵は、その部隊配置において、活動家部隊を誘い込んでは叩くという形へ、従来の単純阻止線型から移行していたからである。そして、権力のそうした街頭戦に対する新たな対応に対して、左翼部隊は従来の羽田街頭戦の型のまま対応したこと、そこに実は、六八年一月佐世保闘争以降一〇・八ー二一新宿にいたる街頭・基地闘争の行きづまりの主体的要因があつたのだ。

b、一〇・二一新宿反乱が切り開いた地区制圧戦の新たな型ー「ゲバ隊・メット部隊・大群衆」の結合と都市人民戦争の型ー

こうした六八年二月以降の街頭戦の行きづまりが巨大な規模で打開され、地区ー都市反乱の新たな戦闘形態を生み出したのが、一〇・八、とりわけ一〇・二一の新宿闘争であつた。

一〇・八の新宿闘争が、われわれを中心としたホーム・構内占拠を突破口とする駅構内・線路占拠から東口広場への制圧戦の波及であつたのに対し、一〇・二一は、まず数万大衆による東口広場の制圧、そこを拠点とする構内への占拠戦の拡大という形をとつた。

すなわち第一に、一〇・二一新宿は、東口広場一帯が大群衆の密集を主体とする解放地区ー一大拠点に転化し、その拠点からゲバルト部隊・ヘルメット部隊の構内突入攻撃を合図とする爆発的な大衆的駅占拠戦に転化したのであつた。

第二に、こうした数万大衆による東口広場制圧。そこから

の構内占拠戦に対しては、ほとんど権力が介入と弾圧に出れなかつたこと、である。すなわち、そのことは、権力の突撃が仮に行なわれても、それは第一に、権力の攻撃体制の分断第二に、組織部隊と群衆による包囲、そして第三に、ゲバ隊による集中攻撃と機動隊せん滅戦の結果しか生まないであろうこと、それらが権力にとつても自明であつたことの結果である。

従つて第三に、群衆による東口制圧、その構内突入と構内占拠戦への爆発的波及という一〇・二一のクライマックスへまでのプロセスにおいては、ほとんど大衆と権力の大規模な接触はなかつたということによつて、現実の姿をとつて登場したことにはならなかつたのであるが、しかし、その一〇・二一新宿反乱が示したものは、「群衆をバックとした闘争。その攻撃部隊としてのゲバルト部隊。大衆の中への敵の包囲・ゲバルト部隊によるせんめつ攻撃」という都市反乱における都市人民戦争という新たな戦術・軍事形態の巨大な可能性ではなかつたか。

ところで、こうした群衆戦とゲバルト戦との結合の問題はすでに六八年一月の佐世保闘争において、萌芽としては登場していた問題であつた。

羽田闘争に対する佐世保闘争の新たな特徴は、第一に群衆の登場、第二にその前衛的行動としての実力闘争、第三にそからである。

c、一一・七に示された裸の単純突撃闘争の破綻

だが、先にもふれたように、佐世保において、このような羽田を上まわる新たな要素ー実力闘争と群衆戦の結合ーが登場し、それは、成田ー王子へと引き継がれたにもかかわらずその新しい要素を無視した活動家部隊の単純突撃闘争の単純くり返しに終始したことが六八年二月以降の街頭・基地闘争の停滞を生んだのであつた。そしてさらにこうした一〇月新宿反乱の巨大な爆発にもかかわらず、その意義と新たな都市反乱戦の戦術について既成の全左翼諸派が盲目であり、旧来の戦術に固執したまま一一月闘争にはいつたというところから、一一・七闘争の敗北的事態が結果したのである。

すなわち、一一・七は、ゲバ棒武装による左翼諸派活動家部隊が、敵の待ちかまえている配置の中に裸で進んで行つたのであり、それに対し権力は、左翼部隊を十分に引き付けておいて包囲し袋叩きにし、その攻撃を合図として権力は一〇・二一の騒乱罪どうかつの全体的波及ーどうかつ攻勢ーに打つて出たのである。

そのことは、一〇・二一の巨大な反乱から、日本の既成の左翼諸派が何も学んでいなかつたこと、それのみか、一〇・二一以前にすでに行きづまつていた街頭における一部活動家の単純突撃闘争を、彼らは中央官庁街において行なうという

どと称して、一〇・二一の巨大な意義と新らしい戦闘形態の前に対置し、その旧来の破綻した路線のセクト的固執に陥つたことを示したのである。そして、その第一歩が、一一・七闘争であつた。

だが、一一・七闘争とそは、権力のどうかつ攻撃への屈服的事態そのものによつて、そうした旧来の街頭戦の中央官庁地帯版ー中央権力闘争論ーの破綻を、その第一歩において暴露させたのである。

そして、こうした一部活動家部隊の街頭における敵の主力に対する単純突撃闘争の現実的破産の裏返しとして、あるいはそうした単純突撃闘争の思考と表裏一体のものとして、活動家部隊による単純籠城闘争が一月一八ー一九日の東大安田闘争をめぐつて突如全面開花したのではなかつたか。

d、学園内階級闘争をめぐる大衆武装の実現とその軍事的エスカレートおよび東大攻防戦における戦術上の諸問題（籠城主義の限界）

ところで一〇・二一の巨大な爆発にもかかわらずその後の左翼諸派の単純突撃路線の行きづまりと権力のどうかつ体制の確立という街頭の全般的状況に比して、一一月以降の学園においては、民青との学園内部の階級闘争を通して、初めて大衆武装が拡大し、火えんビンを中心とする軍事的エスカレートもその攻防戦の反復と全国化のにつまり状況の中から登場してきたのである。

すなわち、この一一月以降の学園内部の階級闘争の本質性は、一〇・二一を頂点にして爆発した反乱の全ゲバルト力が学園に還元されたこと、それが、学園内秩序派＝カンパニア路線派＝日共民青に対する階級闘争のゲバルトに集中され転化されたことであり、それこそが、一一・二二東大集会を契機としてはじまり、一月東大、二月京大を頂点として爆発した対民青闘争の本質的意義である。

こうした中でむかえた一月一八ー一九東大安田講堂をめぐる攻防戦は、だがその籠城主義的性格によつて際立つた特徴をなしており、その根本的検討は、不問に付されてはならない。

即ちそのバリケードは第一に防衛的バリケードであること

第二に、そのバリケードは、その内部から大衆を排除した消極的、セクト主義的性格を濃厚にもつていたこと、

第三に、バリケード内への籠城による「徹底抗戦」は、敗北と玉砕を前提としたものであること、すなわちそれは、玉砕カンパニアとして特徴付けられること、

第四に、確かに、〃玉砕しても抗う〃という政治的アッピールの意義は大きくあるにせよ、しかし羽田以降とりわけ一〇・二一以降の日本階級闘争は、大衆反乱戦線とブルジョア国家権力との間の攻防戦の段階に入つているのであり、従つて一ケの結節点における力関係がその後の両者の階級関係を決するという位地に立つているのであつて、そうした戦術的

帰すうをぬきにした単純アッピール主義は、今日の日本階級闘争の中においては、プチブル的ロマン主義以上のものではありえず、逆に結節的闘争の帰すうが占めている全階級的力関係の意義を甘味化させるものでしかないのである。

従つて、われわれが今日の時点に立つて、また一二月末以降一・一八～一九に至るまでの対民青対権力闘争の激動の中で前衛部分として闘いぬいた地点を踏まえていうならば、一・一八～一九においては権力といかに闘うか、という点において、すなわち権力といかに闘い、いかに権力の壁の打開を追求するか、という点においてほとんど考慮がはられていなかつたというその戦術的欠陥ー戦術そのものの欠陥ーをつき出さざるをえないのである。

戦闘戦術とは、軍事的には敵の打撃を最大にし味方の犠牲を最小にとどめるのが根本である。

従つて、どれほど玉砕しても、というのは、一ケの体系的戦術ーいわゆる路線ーとしては成立しえない。それは、逆に言えば、階級闘争全体が、従来のカンパニア段階から、戦闘状況に入つたにもかかわらず、依然として、市民的アッピールの手段として玉砕闘争を行なうという、カンパニア的枠から出ていないものとして考えねばならない。

従つて、東大闘争に問われていたものこそ、実は、こうしたアッピールの手段としての闘争」という状況から、戦闘そのものをいかに展開し、貫徹するのか」という戦闘戦術の設定とその徹底化への移行であつた。

ではその基本は何であつたのか。

その積極的回答は、広大ーわれわれの教訓ー京大ー九・三〇日大の事実の中に提出されている。しかし、再度確認するならば、

第一に、バリケードの防衛的性格をなくすこと、（封鎖というバリケードの性格から攻撃的性格に展開すること）、すなわち、建物バリケードを背景にしつつも、キャンパスに野戦型バリケードを多角的多層的に設定し、それを攻撃の手段とすること、

第二に、そのことによつて、キャンパスの内に、キャンパス内部のバリケードの内側に全力をあげて大衆を組織し、大衆的バリケード戦に転化すること、

第三に、学園バリケード戦の街頭への波及、

従つて第四に、バリケードは、対権力闘争のための攻撃的武器であり、籠城した五〇〇の活動家は何よりもバリケードと攻撃的軍事的武器による野戦の先頭部隊たらねばならなかつたこと、

だから要塞バリケードは、そうした野戦ー攻撃的バリケード戦ーの根拠地たらねばならなかつたこと、

それゆえ第五に、戦闘力点を学内外の野戦におくということは、攻撃的バリケード戦による対決の貫徹をとおして、更に大衆を結集し、バリケードと大衆によつて権力を狭撃し包

あつたということ、ではないだろうか。

だが、周知のように東大闘争（一・一八～一九）は、こうした方向性とは逆の籠城戦法のもとに展開されたのであり、それは徹底抗戦を形の上からは示しながらも、その実は、権力との戦闘戦術を欠いたところの〝玉砕戦法〟を出ることは出来えなかつたのである。

まさにそれは、一一・七闘争において破綻を露呈させた街頭における左翼諸派活動家部隊による単純突撃闘争と表裏一体をなすものであり、その突如開花した学園版であつたと考えなければならない。

そしてまた、この一・一八～一九における左翼諸派の総力を結集した籠城ー玉砕戦法の敗北は、全国学園攻防戦をめぐる権力の優位を確定せしめ、また対権力学園バリケード戦の展望を一時喪失させることによつて、二月日大以降の権力による対学園バリケードの連続破壊攻撃の強行をほしいままにさせたのである。

e、四・二八のつき出した都市反乱闘争の可能性、

こうして、一一・七以降の街頭のみならず、一月以降の学園も機動隊のどう喝体制下におかれている中において、四・二八闘争が展開された。この四・二八闘争のもつ主体的戦術的問題ー旧来の活動家部隊による単純突撃闘争の破綻と挫折ーについては、先に確認したとおりであるが、しかし、他面

[illegible]

見究めねばならない。

第一に、四・二八闘争の全都的展開力は、客観的かつ自然発生的には、敵権力の配置を中央官庁街の防衛的配置に追い込んだこと、

第二には、これまた自然発生的に展開されたにすぎなかつたにせよ、東京ー有楽町ー新橋の交通線が、闘争の出発点を形成したこと、ーすなわち、その意義が意識化されていなかつたにせよ、全都反乱の拠点は交通線以外にないこと、従つて都市反乱の全般的爆発のためには、交通線制圧・全都交通線分断が主要戦術となることを事実的には中途半端であつたにせよ展開したこと、

第三には、以上第一、第二の積極的可能性を呈示した背景には、一方におけるどうかつ体制の強化に対して、他方においては、反乱戦線の拡大ー学園から高校・中小未組織・一部基幹労働者・国鉄への波及ーがあつたこと、である。

従つて一〇～一一月闘争の基本戦術は、四・二八闘争において自然発生的に開示された展開をまさに目的意識的に追求し爆発させること、それと昨一〇・二一新宿において巨大な可能性を示し、六・二八、七・一九、八・二三の新宿解放闘争において部分的に現実化した都市人民戦争の爆発と結合させること、すなわち、交通線制圧・全都交通線分断・都市人民戦争の爆発として設定されねばならない。

そして、一〇・二一闘争においては、まさに新宿を拠点にして、そうした都市反乱闘争への突破口を切り開き、それへの蜂火を上げることだ。

(二) 四・二八闘争総括と一〇～一一月闘争路線をめぐる左翼諸党派の動揺・動向とわれわれの立場

a、四・二八闘争総括をめぐるブンドの三分解

すでにみたように四・二八闘争は、その客観的な展開力において、交通線分断闘争と都市反乱戦への可能性を自然発生的に示したのであるが、しかしわれわれが繰り返し確認したように、その街頭戦は旧来の単純突撃闘争路線の無力性と挫折を大規模に暴露させる結果となつた。

そのことは、①「革命理論」的には、羽田型の街頭戦を中央官庁地帯街にて行なうことをもつて中央権力闘争とし、それを武装蜂起と二重写しすることによつて「革命の型」とし、その型の実践＝革命的実践とする中央権力闘争論の破綻を意味したのであり、②組織的には、中央権力闘争とマッセンストライキを六八年一〇・二一以降の党派性としてきたブンド関西派の分解に直結したのである。

すなわち、赤軍派の形成と赤軍・中央派・中大派への三分解がそれである。

このように四・二八闘争の挫折が、ブンドの分裂（中心的には関西派の分裂）に転化したのは決して偶然ではない。

[illegible]

の型ー敵の主力に対し、味方の活動家部隊を正規軍編成によつて組織し突撃闘争を行なうーを街頭戦の唯一の型として絶対化しただけではなく、ラテン革命を日本革命に直輸入することによつて、そうした街頭突撃闘争の量的質的な単純延長線上に革命を提起するという形で〝革命の型〟にまで絶対化していたのであり、

第二に、また六八年一〇・二一防衛庁闘争において、こうした羽田型の街頭戦を中央権力地帯にて行なつた、ということをもつて、それを中央権力解体闘争ー武装蜂起と二重写しさせた「中央権力闘争」論をもつて総括し、それを新宿反乱に対置させて一段優位におくという形で打ち出していたのであり、

また第三には、四・二八闘争こそは、その「霞ケ関占拠」（ブンド）、「首相官邸占拠」（中核）というスローガンに示されるようにいずれもこうした「中央権力闘争論」によつてすつぽりとおおわれ、ひきづられていたからである。

だが、四・二八における挫折とは直接的には、街頭単純突撃戦の挫折だつたのであり、理論的には、その中央権力地帯版を「中央権力解体から武装蜂起」へと甘味に、また自然発生的にずり込ませていた中央権力闘争論の破綻だつたのであり、従つてそこから四・二八闘争総括をめぐる論争が赤軍派形成を基軸とするブンドの三極分解へと直結したのである。

従つて、ブンドの分裂は、四・二八を勝利とするか、敗北

[illegible]

化したのである。すなわち四・二八を敗北とした赤軍派は、四・二八の街頭戦の敗北を軍事の単純エスカレート（いわゆる〝機関銃とバズーカ砲〟）とそれを担う〝共産主義突撃隊の組織〟によつて克服すべきものとしたのであり、そこから更に、一一月決戦を〝武装蜂起による決戦〟の時点まで一足とびに飛躍させていつた。これが六月下旬から七月上旬に至るブンドの内部論争の段階であつた。いわば赤軍派は四・二八総括において従来の街頭戦の様式によつては打開しえないという現状認識においてはブンド内の他の二派に対して相対的にリアルであつたといえるのであるが、その困難性ーそれは、学園占拠武装・学園ソヴエトから工場占拠ゼネスト・工場ソヴエト武装への質的転換にともなう困難であり、具体的直接的には都市反乱戦の戦闘形態の行き詰まりにともなうところの困難性ーの階級的性格の把握の不明確性ゆえに、その打開を、武装蜂起による打開へと一ぺんに飛躍させてしまい、「武装蜂起をいかに実現するのか」という戦略戦術的につめー工場占拠・二重権力・武装蜂起ーを完全欠落させていたのである。

だが、こうした赤軍派の登場に対し、彼らを「小ブル殺那主義」であると切り捨てようとした中央ー書記局派は、依然として一〇・二一防衛庁闘争から四・二八闘争にいたる「中央権力闘争論」の党派性ー活動家部隊による単純突撃闘争の

[illegible]

化されている党派性＝に固執し、また中大・三多摩ブンドは、「中央権力闘争を中央権力地帯における中央権力（国家権力）の共同幻想のバクロ闘争ー現実的には中央権力地帯におけるバク…のための実力カンパニア闘争ーとさせたのであり、その結果ブンドは七月に入るや三極へと分解をとげていつたのである。

だが、われわれが、こうしたブンドの分裂を真正面から自己のものとして受けとめ、そのことによつてわれわれがはつきりと確認しなければならないことは、

第一に、これら三派にいずれも共通しているのは、真の権力闘争に向けての戦略戦術が欠落していること、とくに、武装蜂起が、権力（プロレタリア武装権力）による権力（ブルジョア執行権力）打倒の直接行動であることについての欠落

第二に、プロレタリア権力（ソヴエト権力）の根本は、生産過程そのものの武装組織化にあること、すなわち生産主体が生産過程に直接基礎をおいて組織する（反乱→蜂起）の組織＝生産組織と一体化した武装組織こそがプロレタリア権力の本質であることについての欠落、

第三に、従つてまさにそうしたプロレタリアソヴエト権力構築へ向けての原点＝第一歩が、工場占拠闘争・工場占拠ゼネスト反乱にあるという点についての戦略的位置づけの欠如なのであり、

第四には、以上の第一・第二・第三の諸点の追求をぼやかし疎外させているものこそ、そうした生産過程がプロレタリア権力に対しもつている本質的意義を、経済主義の名のもとに切りすててきた街頭主義的街頭革命的思考であること、である。

b、都市ゲリラ（都市パルチザン）戦のエスカレート上に日本革命を夢想する赤軍派

ところが赤軍派は、九月に入るや従来の一一月武装蜂起論をなし崩し的にひつこめ、当面する闘争を〝前段階武装蜂起〟であるとし、〝前段階武装蜂起から世界革命戦争へ〟という路線を党派路線として設定し、大阪における交番襲撃を行なつた。

すなわちここから言いうることは、彼らが前段階武装蜂起と言つているものが、実は都市ゲリラ戦ーレーニンに従つて規定すれば都市パルチザン戦ーに他ならないということである。

それ故に、赤軍派の路線の階級的性格を一言にして要約すれば、四・二八に端的に示された従来の街頭突撃戦の行き詰まりー日本階級闘争の直面している困難ーを、都市ゲリラ戦の展開によつて打破しようとするものであること、そしてまたそうしたパルチザン戦の量的質的エスカレートの単純延長上に革命（武装蜂起）を設定し夢想しているものであること、である。

だが、パルチザン戦の展開で、果して今日の敵権力のどう喝体制を突破しうるのか。それが、従来の「活動家組織部隊による敵の主力配置に対しての単純街頭突撃路線」の行き詰まりを打開しうる路線たりうるのか。

ゲリラ戦とは、少数（三人組、五人組）による秘密行動である。従つてそれの単純くり返しだけによつては、決して巨大な大衆的都市反乱戦へと結びつきもしなければ転化もされえない。

要求されているのは、まさに現在の都市闘争の行き詰まりを真正面から突破することである。そしてそのための根本は、すでに何回となく確認してきたように、敵の弱点ー都市の密集点・交通線ーに全攻撃を集中すること、すなわち攻撃的パリケード戦への大衆結集、それによる権力の包囲・攻撃という都市人民戦争路線以外にない。それは、意識的、組織的部隊が戦闘の中核となり先頭となりつつも、戦闘の担い手を大衆自身に波及させていくということであり、まさしくその意味において都市人民戦争なのである。

そしてまた都市ゲリラー都市パルチザンー戦は、こうした都市人民戦争の内的一環として目的意識的に設定されてはじめて、その戦術的有効性を発揮しうるであろう。

現に九・三〇日大奪還闘争は、大衆的密集点での戦闘行動と切り離された秘密ゲリラ行動の限界をバクロさせたのではなかつたか。

大衆戦ー大衆密集戦と結合したその内部での遊撃戦こそが九・三〇闘争の基軸であつたのであり、九・三〇闘争自体が、赤軍派路線を置き去りにしたのである。

このことから明白となることは、第一に、パルチザン戦の単純反復によつては現在の都市反乱闘争の行き詰まりは打破しえぬこと、それが真の意味をもちうるのは都市人民戦争の一部として設定されたときであること、従つて第二に、こうした都市ゲリラ戦の単純延長上には決して真の権力闘争＝ソビエト武装革命は、設定しえないということである。

それゆえに、〝前段階蜂起から世界革命戦争へ〟というのは、工場占拠ゼネスト反乱・工場ソビエト武装・（二重権力）・武装蜂起というソビエト革命の本質を見失つた街頭主義的街頭革命的路線であり、直言すればラテン革命の直輸入版であるということである。（註）

（註）周知のようにラテン革命（キューバ・中南米）の性格は、その準備から、権力樹立までのプロセスを型としたとき、中国・ベトナムとは、同じ農村後進国革命であるといつても、その型は異つている。中国・ベトナム革命の型を農村コンミューン革命と規定されるのに対し、ラテン革命の場合には、①武装ゲリラ部隊の組織・その遊撃戦による拡大と前衛的地位の確立、②根拠地設定による敵との正面対決から急速な③戦闘の都市への拡大と一挙的軍事行動による権力奪取としてなされるのであり、その内部での遊撃戦こそが九・三〇闘争の基軸であつたのであり、九・三〇闘争自体が、赤軍派路線を置き去りにしたのである。

このことから明白となることは、第一に、パルチザン戦の単純反復によつては現在の都市反乱闘争の行き詰まりは打破しえぬこと、それが真の意味をもちうるのは都市人民戦争の一部として設定されたときであること、従つて第二に、こうした都市ゲリラ戦の単純延長上には決して真の権力闘争＝ソビエト武装革命は、設定しえないということである。

それゆえに、〝前段階蜂起から世界革命戦争へ〟というのは、工場占拠ゼネスト反乱・工場ソビエト武装・（二重権力）・武装蜂起というソビエト革命の本質を見失つた街頭主義的街頭革命的路線であり、直言すればラテン革命の直輸入版であるということである。（註）

（註）周知のようにラテン革命（キューバ・中南米）の性格は、その準備から、権力樹立までのプロセスを型としたとき、中国・ベトナムとは、同じ農村後進国革命であるといつても、その型は異つている。中国・ベトナム革命の型を農村コンミューン革命と規定されるのに対し、ラテン革命の場合には、①武装ゲリラ部隊の組織・その遊撃戦による拡大と前衛的地位の確立、②根拠地設定による敵との正面対決から急速な③戦闘の都市への拡大と一挙的軍事行動による権力奪取としてなされるのであり、直言すればラテン革命の直輸入版であるということである。（註）

だが、パルチザン戦の展開で、果して今日の敵権力のどう喝体制を突破しうるのか。それが、従来の「活動家組織部隊による敵の主力配置に対しての単純街頭突撃路線」の行き詰まりを打開しうる路線たりうるのか。

ゲリラ戦とは、少数（三人組、五人組）による秘密行動である。従つてそれの単純くり返しだけによつては、決して巨大な大衆的都市反乱戦へと結びつきもしなければ転化もされえない。

要求されているのは、まさに現在の都市闘争の行き詰まりを真正面から突破することである。そしてそのための根本は、すでに何回となく確認してきたように、敵の弱点ー都市の密集点・交通線ーに全攻撃を集中すること、すなわち攻撃的パリケード戦への大衆結集、それによる権力の包囲・攻撃という都市人民戦争路線以外にない。それは、意識的、組織的部隊が戦闘の中核となり先頭となりつつも、戦闘の担い手を大衆自身に波及させていくということであり、まさしくその意味において都市人民戦争なのである。

そしてまた都市ゲリラー都市パルチザンー戦は、こうした都市人民戦争の内的一環として目的意識的に設定されてはじめて、その戦術的有効性を発揮しうるであろう。

現に九・三〇日大奪還闘争は、大衆的密集点での戦闘行動と切り離された秘密ゲリラ行動の限界をバクロさせたのではなかつたか。

としてなされるのであり、その基本性格は、武装革命組織による一種のクーデター的軍事革命であると規定できる。中国・ベトナム革命に対するその特質は、①敵との距離が短かく従つて中間地帯や長期の地域的二重権力の条件は存在しないこと、②そこから根拠地設定と都市への波及＝権力奪取は、ごく密着したものにならざるをえないこと、③それゆえに、公然たる根拠地設定は倒すか、倒されるかの決戦の開始であること、④従つてそこには、大衆の政治的結集の余裕もそのための条件もないのであり、すべてが軍事問題に還元されていること、そこから武装軍事組織と一体化した前衛＝党組織という型にならざるをえないこと（実際には、党を名のつてはいない）である。

だが、こうしたラテン革命の型及びラテン革命の組織問題は、①外国資本による奴隷的大鉱山経営と大農園プランテーション、②それらの対米取り継ぎ所としての都市、③両者を維持するための軍隊・警察権力、というラテンの特殊な階級配置に本質的には由来しているのである。そうしたラテンの階級関係は重工業生産過程を基軸とし中小工業を周囲に集積しつつそれらを全国的な鉄道通信機関によつて緊密に結合させている工業的密集国＝日本の階級配置とは異なるのである。

従つて日本革命は、そうした資本の生産過程をプロレタリアが占拠し、そこを革命の本質的拠点＝根拠地へと逆転させるという闘争ー工場占拠闘争ーが原点となる工場ソビエト革

命として規定されねばならない。

また日本革命の武装軍事問題の根本もこうしたソビエト武装ー労働者大衆武装ーに設定されねばならないのであつて、ラテン革命型の少数正規軍武装のみに設定することはできない。党の直接軍事組織＝赤衛軍は、こうしたソビエト大衆武装の目的意識的中核軍であつて、両者の結合と後者による全体の武装の質の目的意識的質への転化ー反乱の武装から蜂起の武装への質的転化ーこそが党の政治的任務となる。

従つて、日本革命における党組織の型から言つても、ラテン革命型ー党組織＝軍事組織とすることは出来ない。党にとつての政治的活動は根本であつて、軍事革命委員会ー赤衛軍は、党組織の内的一部として組織されねばならない。

c、単純突撃闘争の量的質的エスカレートを路線とする中核派

だが、こうした傾向は、赤軍派だけのものではない。現在の左翼諸党派が、ひとつにはプロレタリアソビエト革命への戦略戦術を欠落させているという原則上の問題から、さらには四・二八においてバクロされた従来の街頭単純突撃闘争路線の行き詰まりとによつて、彼らがこうした単純パルチザン戦の方向に傾斜する要因をはらんでいるとみられるからである。

その傾向は、現八派協の指導部＝中核派の対赤軍評価に端的にみることが出来る。

すなわち、中核派は、「前進」九月一五日号において、赤軍の問題提起に依存しつつ、また彼らも、赤軍のいう前段階蜂起をパルチザン戦に当るものと規定し、革命への発展過程を次のように規定している。ー

①平和的ストライキとデモ

②ストとデモの戦闘化。初歩的な武装。警察力との衝突。占拠＝とりで化。

③ストとデモの革命的貫徹のための比較的水準の高い武装。パルチザン戦の初歩的形態との結合。

④一斉蜂起を準備しつつ、ゼネスト・デモを基底としての小戦闘、部分的蜂起（高度の市街戦）と広範に発展したパルチザン戦との結合。

⑤一斉武装蜂起

だが、中核派のこうした革命闘争の発展過程論ー主体的に言いなおせばプロレタリア権力樹立への戦略戦術的つめーに示されているものは、

第一に、デモとストとを一貫させて平行させていること、すなわち、ストライキのもつ本質的意義をふまえていないこと、

第二に、従つて、そこにはストライキの質的区別が何ら設定されていないこと、ローザルクセンブルグでさえ、示威的ゼネストと大衆ストライキ（闘争ゼネスト）との区別を設定

し、闘争ゼネスト＝大衆ストライキに革命闘争の基礎を設定しているのでありわれわれは、更に大衆ストライキのもつカンパニアゼネストに対する本質的意義を工場占拠闘争として設定しなければならないにもかかわらず、彼らはそうした規定と区別を設定していないこと、

第三に、そうした質的区別ー質的発展が一応設定されているのは街頭戦においてだけであること、それは、パルチザン戦の初歩から高度化への質的発展としてのみ設定されていること、

第四に、結論として提起されている「一斉武装蜂起」なるものの性格が曖昧であること、それは、プロレタリア武装権力によるブルジョア権力の打倒＝武装蜂起を言つているのか、あるいはプロレタリア大衆の武装反乱を言つているのか、それが曖昧であり、中核派の論理をつめれば、パルチザン戦の全面化をもつて一斉武装蜂起としているように見えること、だがそれでは、日本におけるプロレタリア武装の根本である工場占拠を基礎としたソビエト武装が全く曖昧であること、従つてまたそこでは工場占拠ゼネスト→工場ソビエト武装（二重権力）→武装蜂起、という戦略戦術の基本が欠落していること、

従つて第五に、以上四点を総括して言えることは、中核派の展望論なるものも工場占拠闘争の本質的意義をふまえ得ないところから来る街頭主義的街頭革命論であること、そして実はそこから赤軍派的傾向ーパルチザン戦の拡大に革命闘争の基軸を設定する傾向ーへのずれこみが発生するものであること、である。

ところで、このように赤軍派的傾向にずれこみながら革命闘争展望論を打ち出している中核派の一〇～一一月闘争方針は、実践的にはどのように提起されているのか。

それは、従来の活動家部隊による街頭突撃闘争の延長線上に設定されており、四・二八におけるその挫折を従来の路線の量的質的エスカレートによつて打開しようとする路線として設定されているように見える。

すなわち「四・二八について言えば、それに投入された活動家の量、精神的武装面での肉弾戦の思想の弱さなどについて具体的に総括しなければない」「一撃必勝！ 機動隊との最初の出合いにおける己れを肉弾とした突撃にすべてを凝縮せよ」（「前進」九月一五日号）としているのである。

だがそこには、四・二八の戦術的（戦闘戦術）総括がないのであり、従つてそこから脱すべき一〇・二一～一一月闘争のための戦闘戦術が語られていない。

確かに一一月佐藤訪米阻止闘争においては、活動家の量・質のエスカレートは基礎条件である。

また、そうした点からする中核派の四・二八総括ー行動隊の緊密な組織と肉弾戦の思想的武装ーを一面ではわれわれは受けとめなければならない。

なぜなら、都市交通線制圧闘争↓全都交通線分断闘争のためには、武装行動隊の密集した直接行動が事態の突破口を切りひらく位置にあるからである。

それゆえに問題なのは、こうした形において、すなわち、交通線制圧・全都交通線分断闘争の中核部隊として行動隊の質的量的エスカレートが位置づけられるのではなく、従来の街頭突撃戦ー敵の正規軍に対する味方の正規軍編成による突撃ーの単純延長線上にそれが設定されているということである。

すなわち、そうした行動部隊が、どこにおいて、どのように敵と闘うか、という問題に発展させられることなく、従つて、戦術方針に転化されていない精神主義的傾向を濃厚とさせていることである。

従つて、そこから、一一月における肉弾戦の怒号、それまではカンパニアの積みかさねという路線しか出て来ないのであり、あるいは、単純肉弾戦か、パルチザン戦かという不毛な二者択一しか出て来ないのである。

「一撃必勝、最初の出合いにおける突撃に一切を凝縮せよ！」ーだがこの方向性は、どこにおいて、どのように敵と闘うか、という問題抜きにしては特攻隊型ー単純玉砕と敗北ーに結果しないと誰が言えるのか。

現に、四・二八においては、中核派の指摘する行動隊の質的量的弱点をふまえたとしても、敵の主力の配置に対する行動隊だけの突撃は権力の壁を何ら突破しえていないという冷厳な事実をどう総括するのか。

さか上れば、先にわれわれが総括した一〇・二一の示した巨大な可能性ー分断と包囲攻撃を恐れて権力が攻撃しえなかつた事態ーと、一一・七における味方の壊滅的事態ー敵の主力のふところに行動隊が裸で飛び込んで生れた事態ーをどう学ぶか、という問題に結果する。また遊撃戦と群衆戦の流動的結合による権力との全面対峙を形成した七・一九新宿東口解放闘争と、遊撃的行動隊と大衆戦の結合によつて権力の制圧体制をゆり動かした九・三〇闘争の総括をいかに行うかという問題とも直結しているのだ。武装行動隊の任務は、まさにそうした七・一九新宿東口状況や九・三〇お茶の水駿河台戦の水準を十分に評価し、さらにその上に立つて、交通線制圧闘争・全都交通線分断闘争による都市反乱戦の爆発へと発展させる点に関わつて設定されねばならない。

では、一一月決戦をどこにおいて闘うかー敵の弱点において、すなわちブルジョア社会の弱点においてだ。それは、都市の交通線の密集点＝大衆密集点においてだ。それこそが、都市反乱の拠点である。

いかに闘かうかー大衆と群衆を闘争に結集することによつて、それによつて敵の体制を混乱させ、マヒさせ、分断させることによつて、またその武器としての攻撃的バリケード戦と闘争手段とによつて。

4、一〇～一一月闘争をめぐる階級情勢とわれわれの任務及び行動方針

(1)一〇～一一月をめぐる階級情勢

同志諸君！　全国の戦闘的労働者学生諸君！

眼を敵の動向にすえ直してみよ！　そして九月初旬から愛知訪米以後の事態の緊迫性をはつきり確認しようではないか。

第一に、愛知訪米によつて敵の安保攻撃は急進展した。

愛知訪米の結論は、「返還」後の沖縄からベトナム・台湾・韓国への米軍自由出撃を共同確認した点にあつたこと、また、韓国で開催されるアジア各国軍事首脳会談に自衛隊統幕議長の正式参加が進んでいること、である。

第二に、このことは、今や七〇年安保が、沖縄安保ーアジア安保への突破口としての沖縄安保ーとして、急激に浮びあがつてきたことを意味する。

何故なら、沖縄「返還」の現実的に意味するものは、アメリカの基地自由使用のみならず、自衛隊の沖縄派遣であり、従つてそれは、沖縄＝沖縄軍事基地ーの共同防衛体制の形成を意味するからである。

だが、共同防衛体制とは、軍事的には、共同攻撃体制と同義である。

従つて、急進展している事態ー沖縄安保・沖縄の日米共同防衛体制化ーの本質は、沖縄安保を突破口として、すなわち沖縄を日米安保の新たな要とすることによつて、米・日を両軸とするアジア安保への本格的動向が、日本帝国主義の側においても開始された、ということだ。

今やベトナム・韓国・フイリピン・そして日本の革命戦争と階級闘争に対して、同時に、中国・北鮮・北ベトナムに対する反革命どう喝体制として、東南アジア全域の多角的相互防衛（反革命）体制ーＮＡＴＯ型体制ーへの動向がつき進んでいるのである。

こうして現在急転回している動向は、実は、昨年四月のベトナム和平会談以降アメリカが開始していた動きなのであつた。

すなわち、ベトナムに対するアメリカの介入のゆきづまりは、米帝に対して従来のアジア戦略体制の根底的再検討をつきつけたのであり、和平会談はそのための時間かせぎにほかならなかつた。そのアメリカの再建コースこそ、アジア体制の一角に日本を引き入れることであり、それによるＮＡＴＯ型の多角的防衛体制の確立なのであつた。

周知のように、ＮＡＴＯは、米ー英ー西独を軸とする伊・仏ら西ヨーロッパ帝国主義諸国の多角的防衛体制であるということに対して、アメリカのアジア反革命軍事体制は、米ー日、米ー韓、米ー台、米ー比、米ー南ベトナムというアメリカを対極とする二カ国間相互防衛体制によつていたのであり、唯一の多角的防衛機構＝ＳＥＡＴＯは、解体傾向に瀕してい

るのである。

従つて、愛知訪米によつて開始された事態は、日本もまたこうして東南アジアの多角的防衛体制ー米・日・韓国・台湾・フイリッピン・ベトナムーの形成の動向に、アメリカに引きづられつつも、のりだした、ということであり、沖縄安保こそがその突破口に位置している、ということである。

そしてまた佐藤訪米の根本目標もその点にあるのだ。

それだけではない。

第三には、訪米ー「沖縄返還の時期設定」による国民ナショナリズムの形成によつて、一挙に総選挙（一二月〜一月）にもちこみ、その圧勝体制のもとに、七〇年四月〜六月は、国会を空白状態におこうとしているのである。こうして今や敵自らが、七〇年の全問題を一一月にずりこませ、一一月による決着に打つて出ているのだ。

しかも彼らは、こうした訪米ー沖縄返還（沖縄安保）ー総選挙の公然化によつて、社共を文字通りの選挙カンパニアの枠内へと追い込もうとしているのであり、またそれによる大衆反乱戦線の孤立化とそれへの集中攻撃をもくろんでいるのだ。

第四に、こうした一一月を前にして、すでに彼らは、彼らの一一月決戦をのり切るための全力を上げた戦闘体制に入りその攻撃を開始した。それこそ、八月下旬以降の大学治安立法施行のもとでの相次ぐ学園バリケードの破壊ロックアウト攻撃であり、大量逮捕攻撃であり、街頭合法デモに対するどう喝のためのほしいままの攻撃であり、事前捜策、事前検挙の徹底化であつた。

従つて、こうした支配階級の全動向から言いうることは、

第一に、七〇年安保が、沖縄安保ー日米安保から、米・日を軸とする多角的アジア防衛体制への突破口ーとして設定されたこと、

第二、敵の政治攻撃路線が、一一月訪米ー沖縄返還ー総選挙ー七〇年四〜六月の国会空白化として設定され、七〇年安保の全問題が一一月にずり込まされ圧縮されたこと、

第三、従つて敵は、一一月を決戦としているのでありそのためにすでに彼らは攻撃を開始していること、である。

では、これに対して社共既成指導部はどうか。

彼らは一面では、こうした権力の総選挙どう喝に屈服し、他面では自ら政府とのなれ合い闘争にこびを売つているのだ。それこそが反戦青委絶縁宣言であり、またそうした選挙カンパニアこそが、一〇・二一の社共共闘と一一・一三の一時間半のカンパニアストライキなのだ！

同志諸君！　全国の戦闘的労働者学生諸君！

一〇月〜一一月に要求されている闘争は、まさにこうした政府支配階級の一一月決戦とそれに屈服しつつ協調している社共選挙カンパニア闘争の両者を、その根底から粉砕する大衆反乱闘争の爆発だ。

しかもわれわれがはつきりと確信しなければならないことは、そのための重要な基礎条件ー大衆反乱戦線の拡大ーは、着実に進んでいるということだ。九・五全国全共闘、九・一五全関東反戦決起集会の規模を見よ！　あるいは、高校における学園内部の高校生反乱の開始、基幹・公務員における反戦派労働者の台頭と社民・日共・組合官僚対決闘争への結集がそれだ。

そして、こうした大衆反乱戦線の拡大と深化を基礎として一〇・二一〜一一月へ向けての戦闘気運ー正しく有効な方針のもとにならば闘い抜く戦闘性ーはみなぎりつつある。

従つて、全問題は、われわれがくり返し強調してきたようにそうした戦闘方針を提示しえず、破綻した従来の街頭戦の型に固執しているか、その右からの手直しー対中央政府実力カンパニアーですりぬけようとしているか、あるいは、パルチザン戦だけの強調ですませているという現在の左翼諸党派の危機ー従来の街頭戦の破綻とその打開をなしえずに混迷している危機ーにこそあるのだ。

また、従来の街頭戦の行きづまりを突破して、一〇・二一に向け都市人民戦争の突破口を切りひらいた九・三〇闘争がこうした八派協の事実的分解状況のままに、展開されたという事態こそは、まさに、現状況の鋭い反映ではないか。

(ロ)われわれの行動方針

問われているのは、従来の路線の行きづまりを打破する新しい路線であり、そしてまた、その路線のプロレタリアソビエト革命路線における本質的任務設定である。

その路線とは何か。すでにそれは、われわれが、われわれ自身の闘いの総括を通してくり返し明らかにしてきた路線、すなわち、都市人民戦争ー都市密集点における遊撃戦と大衆戦・群衆戦の結合、攻撃的、流動的バリケード戦、それらによる敵の分断・分散化と大衆の中に孤立した敵に対する包囲攻撃戦ーであり、

また、そうした都市人民戦争と結合した、都市交通線制圧・全都交通線分断ー都市反乱戦ーである。

全国の同志諸君！　われわれの行動方針は次のように設定されねばならない。

①一〇・二一新宿都市反乱・都市人民戦争を突破口として一一月佐藤訪米粉砕・交通線制圧・全都交通線分断・都市人民戦争の爆発へ！

②一〇・二一新宿都市人民戦争を、一一月佐藤訪米粉砕・全都交通線分断・都市反乱の突破口とせよ！

③そのために、戦闘行動部隊・大衆行動隊を組織せよ！

(ハ)われわれの任務

同志諸君！

こうしたわれわれの路線は、これまたすでにくり返し確認したような革命路線、すなわち、

①工場占拠闘争こそ、ソヴエト革命権力への原点であること、（工場占拠闘争の戦略的意義）

②従つて、学園占拠・都市反乱は、国家権力の無力性をアバキ出し、工場職場占拠闘争への展望を切りひらくための手段であること、同時に、その都市反乱のエネルギーの工場職場への還元は、社民・日共・組合官僚粉砕闘争ー内部反乱ーへと集中せねばならないこと、すなわち、工場占拠闘争のための直接の媒介としての内部反乱闘争の位置、

③それゆえに、そこから、日本におけるプロレタリアソビエト権力樹立への道ー戦略戦術ーは、工場占拠ゼネスト・二重権力・武装蜂起としてのみ普遍的に設定されること、

④従つて、日本革命の基本性格は、ソヴエト革命であり、またその武装（権力）問題の根本は、工場ソヴエト武装ー工場労働者数百万の直接大衆武装ーにあること、党直接の赤衛軍は、その軍事的中核であり、従つて両者の結合が課題であること、

それゆえ以上から規定される党組織の型は、ラテン型ー赤軍派型のような党＝軍事組織ではありえず、軍事革命委は、党組織の一部たること、

⑤日本のソヴエト権力の世界的任務は、対米世界革命戦争の貫徹・その勝利によるプロレタリア独裁の世界的樹立ー世界共産主義にあること、

以上の革命路線の内的一環であり、そこにおける当面の行動方針以外の何物でもない。

全国の戦闘的労働者学生諸君！

こうしたプロレタリアソビエト革命実現の明確な展望のもとに、一〇ー一一月闘争を闘いぬくために青年共産同盟に結集せよ！

全都全国の労働者学生諸君！

☆一〇・二一新宿に総結集せよ！

☆そのための戦闘部隊と大衆行動隊を組織せよ！

☆都市人民戦争の爆発を実現せよ！

☆それによつて、一一月佐藤訪米阻止闘争への巨大な展望を切りひらけ！

☆一〇・二一新宿都市人民戦争を突破口として、一一月佐藤訪米粉砕・都市交通線制圧・都市反乱戦の爆発へ！

☆この方針のもと、あらゆる大衆行動委員会を安保共闘に結合し、総進撃を開始せよ！

千代田区飯田橋３－１－６　飯田町ビル
前　衛　社　　１５０円